
闇鳥のナキカタ

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇鳥のナキカタ

【Nコード】

N3950E

【作者名】

式織 檻

【あらすじ】

チームを組んでるロットとルーに引きずられ、ギルドの仕事に精を出す日々 もいよいよ佳境。秘密結社『カザミドリ』に名指しで宣戦布告され、俺達の行く末は一体どっちなのか、何よりも誰よりも俺自身が知りたいんだが……。

プロローグ（前書き）

本作は「闇鳥のトビカタ」「闇鳥のウタイカタ」に続く三作目となっております。先に前二作をお読みいただくことをお奨めいたします。

プロローグ

「あなたは……今まで……何人の人間を……殺したことが……ある……の？」

閉店間際の閑散としたレストラン。

テーブルを挟んだ向かい側で、白いショートヘアを揺らしている少女　ワイト^{II}ホール　は、まるで世間話でもするかのように、何の前置きもなく、何の前触れもなく、何の予兆もなく、そんな唐突な質問を俺に投げかけてきた。

どうしようもないほどに虚をつかれた形になった俺は、こんな危うい会話を他人に聞かれやしないかと周囲を気にしつつ、それと並行してなるだけ冷静に頭の中で文を構築しながら、

「何人？　　って、いや、まあ、確かに俺は殺し屋もどきではあるが、実際のところ俺が俺の意思で俺の体をもって俺自身のために人を殺したことは、一応、今のところはないな。だが、間接的になら　　一度だけ。ほら、この前の、カザミドリ十三番隊壊滅作戦の時だ」

「そう　　直接……というなら……それは私も……同じ。……私自身が望んで……他者の命を奪ったことは……一度も……ない。……一度だって……ありはしない。……でも　　」

ワイトは、目の前のグラスに入ったジンジャーエールを一口だけ含み、

「　　私の体は……今まで……数え切れないほどの人間を……殺して……きた。……命を奪って……きた」

「……『体は』？　　そりゃつまり、無理矢理やらされたってことか？」

「そう」

ワイトはゆるやかに頷く。

「『ツバメ』の性能を……試すため……その攻撃を……無抵抗な人間に……加えて……きた。……斬って……突いて……刺して……裂いて……焼いて……燃やして……消して……できうるすべての苦痛を……他者に与えて……きた。……他者の存在を……消して……きた」

「……でもそれは、お前が望んだことじゃないんだろ？ お前の意思じゃないんだろ？ だったら、それはお前が気に病むことじゃないだろう。悪いのはカザミドリだ。お前じゃない。お前に非はないお前の腕には不愉快な感触が残ってるだろうが、だからこそ、それを戒めとして」

「違う」

俺の発言をさえぎり、ワイトは首を横に振った。

「それは……私も……分かって……いる。……承知して……いる。……私が逡巡しているのは……そこじゃ……ない。……そこじゃないくて……その事象が原因で……私が……私自身が……私の存在が……他者によって

否定される……こと」

「……否定……される？」

俺は、文脈から飛躍して登場した単語をそのまま聞き返した。
ワイトはあごを縦に動かして、

「そう。……私は今まで……数え切れないほどの拒絶を……受けてきた。……私の性能が……発動するたび……私は否定され続けて……きた。……たとえ……精神を閉ざしても……彼らの怨言は……どうしても……耳に……届く。……耳に……残る。……彼らの悲涙は……視界に……入る。……視界に……映る。……その度に……私の存在が間違いであることを……気付かされる。……思い……知らされる」

ワイトはうつむき、右手でもって包帯が巻かれた左腕をぎゅっと

握り締めながら、

「私は……買われる以前から……一度も……存在を……肯定された
ことが……なかった。……そんな経験が……なかった。……そんな
存在が……いなかった。……あなたや……ウエリイに……出会う……
まで。……なのに……あの時の私には……自分を殺す自由がなく
て……心を殺す術を知らなくて……ただ……ただ……恨まれて……
きた……呪われて……きた……否定されて……きた……拒絶されて
きた。……あなたやウエリイに……出会ったことで……改めて
……わかった……改めて……思った。……あの……殺戮の……時間
……虚無な……時間……無為な……時間……苦痛の……時間」
その水面のような瞳を前髪で覆い隠して、

「……もう……嫌だ」

ワイトは怨嗟のように、ぽつりと、声にした。

そして顔を上げ、俺の目を直視して、

「私は……命を懸けて……あなたを……守る。……あなたのために
……すべてを……投げ出す。……できることは……すべて……やる。
……あなたに何をされても……私は……そのすべてを……受け入れ
る。……抵抗せずに……黙認……する。……心も……体も……すべ
てを……差し出す。……あなたの好きに……して……いい。……自
由に……して……いい。……だから……だからだから……あなたは
……あなただけは……私を……否定しないで……拒否しないで……
拒絶しないで

私のことを……見限らない……で」

第一話

昼下がりの喫茶店。

穏やかな午後の時間をお茶でも飲みながら満喫しようと集まってきたんだらう、なかなかの人数の客が、あちらこちらの席でガヤガヤと話しこんでいる。見たところ、客層は主婦や若人が主。……まあ、平日のこの時間に行きたくないのは、その辺りの人間だらう。俺はガラス越しにそんな店内の状況を確認しつつ、店の中に入っていた。

別に俺は、紅茶片手にゆったりと時間を過ごすためにこの店に入ったわけじゃない。現在の俺にはそんな余裕はないのである。できるだけ早く、ギルドでリストを睨みつつ次の仕事を決めなければならぬのだ。

それでも俺がわざわざここに来たのは、ようは呼び出しを食らったからである。その呼び出された相手というのが、これまた意外で

「ダルク、こっちですわ」

奥の方の四人掛けの席で、俺に手を振ってくる奴がいた。ロール巻きの金髪に、黄色いドレスをまとった女の子。ウエリイである。

俺は呼ばれるままにそっちへ向かい、ウエリイの向かい側に腰を降ろした。

イスにふんぞり返っていたウエリイは、俺の顔をじりと見つめると、

「……まったく、遅刻ですわよ。女性を。しかも、よりによってわたくしのことを。待たせるとは、あなた一体何様ですか？」
つんとした声で言うてくる。

店内の壁時計を見ると、針が示してる時間は二時三十分二十八秒。約束の時間は二時半だったんだから

「遅刻って三十秒だけだろ。それに俺だって暇じゃないんだ。そっちが呼び出したんだし、お前にそこまでなじる権利はな」

「で、今日呼び出した用件ですが」

……俺の主張を軽快に無視しやがった。

「まず、ワイトの件については、あの娘の左腕は」

「……ああ、昨日直接聞いたよ。義手をつけるんだろ？」

「ええ。業者にはすでに発注していて、来週には完成するそうです。ですので、その取り付けが終わるまで、あの娘はしばらく仕事に参加できなくなります。……というか」

ワイトは眉をぴくりとひそめて、

「あなた達、わたくしの知らないところでようも頻繁に会っているようですね？ 別にとがめるつもりはありませんが、あなた、そのつもり ならば、あの娘のことをしっかりと考えなければなりませんよ？ 人生も将来のことも。早急に女性一人を養っていく甲斐性をつけてください」

いやいや、それは話が飛びすぎだろうに……。

「……しかしまあ、この前のこと については、あの娘から聞きました。その 背景 も。もしあの時、家にあの娘一人だった場合、一体どうなっていたか分かりませんでしたからね。ですから、同じチームのメンバーとして、一応あなたに礼は言っておいてさしあげましょう ありがとうございます」

あごを引いて、会釈のような仕草をするウエリイ。

……ここまで尊大なお礼なんて初めてだ。まあ、こいつにお礼を言われること自体がレアなことだがね。知り合って一年の付き合いだが、これが初めてだ。

というか

「それだけのために俺を呼び出したのか？」

「違います。本件は別です。今日あなたに来ていただいたのは、人

に　　あ、来ました」

ふと、ウェリイは俺の背後、通路の方に視線を動かした。

誰が来たのかと振り返ろうとしたところで、ジャラジャラと軽金属がぶつかる音が俺の耳に入ってくる。

そしてその金属音が俺の横を通り過ぎ、いよいよ俺の視界に　そいつ　が入ったところで　俺は全身の筋肉を強張らせた。それは、Ｔシャツにサンダル、チャーンを首にまきつけて、黒いニット帽の脇から紫の髪はみ出させた、卑しくいやらしい笑みを浮かべた男

イヴァリー＝シャルだった。

「や、元気してた？」

俺の向かい側、ウェリイの隣にどっかりと座りながら、イヴは晴れ渡る午後にふさわしい陽気なあいさつをしてくる。

しかし俺は、反応できない。

「ふはは、一週間ぶりくらいかな。まさか、オレのこと忘れたなんてことはないよね？　あれ、結構インパクトの大きい現場だったもんね」

まだ俺は、反応できない。

「あいつ　も一応元気なんだってね？　いや、失敗例だとしても、元　所持者　の一人としては、あいつの行く末はある程度気になったりもしてるんだ。もちろん、興味としての範囲でだけだよ」

やはり俺は、反応できない。

「……というか、どうしたの、我が親愛なるダルク君？　元氣ないねえ。反応薄いよ？」

どうしても俺はイヴに対して反応できず、その隣のウェリイへと視線を動かして、

「……ど、どういうことだ？　なぜお前が、こいつと知り合いなんだ……？」

「別に、知り合いというわけではありません。わたくしとこいつは、ただの」

「元カノさ」

ウェリイの声にかぶせ、イヴがにたり笑いで言ってくる。

しかしウェリイは、その笑顔をわななきながら睨みつけ、

「で、でたらめを言わないでください！　いつわたくしがあなたな
んぞと」

「だって、デートしたじゃん」

「してません！　ただ二、三度食事につき合っただけです！　断じてデートなどはありません！」

いきり立ち、ツバを飛ばしながら叫ぶウェリイ。

それをけらけらと笑って眺めるイヴ。

俺は双方の反応の違いに戸惑いつつ、

「……どういうことだ？」

「どうもこうもありません！　以前からわたくしはこいつの顔と名前を知っていたという、ただそれだけのことです！」

「……でも、何でお前がこいつと？　だってこいつは、カザミドリの
の」

「ですから、わたくしが　それ　を知る前に、仕事で知り合っただけです！　……こいつらの常套手段なのですわ。正体を明かさないまま将来有望な人間にそれとなく近づき、そして」

「　勧誘する」

再度、イヴがウェリイの発言にかぶせてきた。

「……勧誘？　って、まさか、カザミドリに？」

「そうさ」

悪びれる様子もなく、イヴはこくりと首を縦に振る。

「二年くらい前かな？　オレはウェリイにアプローチをかけてたんだ。オレの隊の副隊長っていうポストを空けてね。でも、見事にフ
ラれちゃったのさ。両方の意味で。そりゃあ、もうショックだったよ。初恋だったし。半年間にわたるオレの努力が、見るも無残に碎

け散ったんだから。それから数ヶ月、食事がのどを通らなかったよ」
苦笑しながら説明するイヴ。しかし俺には、その表情が演技にしか見えない。

俺は再度、コップの水を口に入れているウェリイの方へ顔を向け、
「……いや、以前からの知り合いだったとしても、こいつの本性が分かっているながら、ようもお前はこいつとの付き合いを継続できるな。悠長にこいつの隣に座って。……分かってるのか？ こいつがワイトをあんなにした張本人なんだか」

「これが『悠長』に見えますか？」

そう言いながら、ウェリイは右手に握ったコップを俺の方に差し出してきた。

高さの七分目までなみなみと入った水。その水面を見ると小刻みに波打っている。……ウェリイの手が、震えてる？

「わたくしの神経はいたって正常ですわ。こいつのそばにいただけで吐き気をもよおしますし、ワイトの世話役として怒りも覚えています。……しかしわたくしは、このイヴァリーの本性を知っているからこそ、必死に感情を自制しているという、それだけのことです」
ウェリイはかすかに声を震わせながら説明してくる。

しかしイヴは、緊張も激情も微塵もないような声音で、

「まったく……ウェリイってば、『イヴァリー』だなんて他人行儀だなあ。普通にイヴって呼んでよ。ねえ？ 前はそう呼んでくれてたじゃん」

「……不可能ですわね。あなたの本性を知ってそれでも愛称を用いるなんて、まともな人間の所業ではありませんわ」

……少々耳が痛い。しかし自分から見ても、俺が社会一般から見てもまともではないことは否定しようもない真実なので、反論はない
いや、今気にするべき問題はそこじゃない。そこじゃなくて

「なぜお前が、再び俺の目の前に現れた？ 何が目的だ？」

「いや、情報屋のムツナっち伝いで、ウェリイからオレに連絡というより、この前のことの確認 が来てさ、その際にウェリイ

と君が知り合いだつてことも聞いたんで、呼び出してもらったんだ」
「で、用件は？」

「ふはは。そんなせつつかないですよ。もつと会話を楽しもあ、もしかして時間無いのかな？ この後用事あるの？ だったら悪かったね。よし、分かった。味気ないけど、早く本題に入ろう。

……ええとね、オレが聞きたいことは、まあ至極単純なことだし、君はイエス・ノーで答えてくれればいいだけなんだけど、つまるところの我が敬愛するダルク君、君さあ

カザミドリに入らない？」

テーブルにひじを寄せ、あごの下で手を組みながら、冗談めかした口調をすべて消しさつて、静かに、イヴはそう言ってきた。

しかしそれに対する俺の返答は、確認するまでもなく分かりきつたもので、

「……嫌だよ」

「拒むなら、オレは君のことを実力行使で連れて行く　　って脅しても？」

「この前、俺に潜伏を見破られたのはどこの誰だ？　俺とお前にはそこまで圧倒できるほどの実力の差がないことは、お前も分かっているんじゃないのか？　俺を殺しにかかってきて、お前も五体満足でいられると思ってるのか？」

「……ふはは、思つてないさ」

イヴは表情を和らげ、肩をすくめながら答えた。

「あーあ、またフラれちった。正直、君ら三人の評価は、カザミドリの中でも最近上がってきてるんだ。段々注目されてきてる。……ただ、ルーさんは事情が事情だけに誘えないし、ロット君の方も彼の生きる　目的　を聞いた限りじゃ　オレ達に加わってくれないことは明白だからね。誘うならダルク君、君だと思つてたんだけど。……あーあ、失敗か」

「……用件はそれだけか？　なら、俺はこれで」

「いや、もう一つあるんだ」

立ち上がるうとした俺を、イヴが制してくる。

俺はもう一度イスに腰を降ろしながら、

「何だ？」

「いやさ、これは君からのリアクションが欲しいわけじゃなくて、オレから君　というより、君のチームのメンバー三人　への一方的な発言だから、ただ聞いてくれればいいだけなんだ。だから何も考えず耳を向けてくれればいいんだけどさ。……こほんっ。行くよ？　ええと、ダルク君、およびロツト君とルーさん。君らがオレ達に加われないことは理解した。ということで、前回は見逃してあげたけど、今度会うときは、オレ達力ザミドリは

君らのこと、本気で殺しに行くからね？」

あくまであくまで穏やかにニコやかに　しかしそれとはまったく相反した意味の文言を　イヴは口にした。

俺は反応できない。

「……ふはは。じゃあ、そういうことだから、それまでお元気で。間違っても、オレ以外の相手に不覚をとらないでよ？　オレも楽しみにしてるんだから。君らとのコ・ロ・シ・ア・イ。ふはは、では、失礼」

どこまでも楽しそうな声でそんなことを言いつつ、イヴはテーブルの上に十ドル札をひらりと置きながら、イスから立ち上がってすたすたと出口へと向かっていった。

眼前では、ウェリイが俺のことを　というより、実際はロツトのことを心配しているのだろう　不安げな表情で見つめてくる。

俺はその顔から視線を外すように下を向き、まるで頭を悩ませているように、あるいは後悔するように、手の平で顔を包んだ

が、ウェリイの死角となった手の影の下、自分でも不気味なほど

自然に

不自然な笑みが、俺の顔に浮かんだ。

第二話

「ふーむ……。つまり我々は、秘密結社カザミドリの十三番隊長たるイヴァリーから、名指しで直々に宣戦布告された　塩を送られた、ということか……」

ギルドの一角の長机に陣取り、全体重が背もたれにかかっているじゃないかと思うほどイスにふんぞり返りながら、赤短髪少年ロットは、俺の説明に対して、相変わらずの偉そうな口調のままでそう答えた。

その隣、俺の話を目を真ん丸く見開いて聞いていた青長髪少女ルーは、

「えー、そんな、殺されるなんて怖いよ……。『今度会ったら』って、もしも今日会ったら、今日殺されちゃうってこと？　そんなのやだよー。今日の晩御飯、カレーなのに」

…… 人生を後悔する項目にカレーを加えるな。

いつものことだが、どんな深刻な問題もこいつらに話すとそれほど致命的でもないような気になってくるから不思議だ。ただ単に感覚がずれてるだけなんだが。こいつらに相談しても何も解決しないことは百万年前から分かってきってたことだが、一応こいつらも当事者なので知らせないわけにもいかず、昨日イヴから受け取ったことづけを知らせてやったのだ。

まあ、結果は予想通り。元々期待なぞしてなかったんだから、あの意味期待通りだと言えなくもない。逆方向に期待を裏切られるよりはマシだろうか。

俺はその辺りの感想文を胸中の原稿用紙に書き記しつつ、

「……で、問題はこれからどうするか、だ。イヴ　　というより、カザミドリにどうやって対処していく？　まず夜の外出なんかを控えることと、一人での行動をなるべく避けることは最低限必要だが……。他に何か提案はあるか？」

「そんな付け焼刃的な対処をしても、焼け石に水だろう」

ロツトは「これだから凡人は……」と言わんばかりに肩をすくめ、「そんなちゃつちい対策なぞ、講じる必要はない。『夜に外出するな』などと言つて、もし夕飯時に醤油を切らしてしまつたらどうするつもりだ？ お隣に醤油ビンを借りに行くこともままならないだろう。生姜だけで豆腐を食えというのか？ そんな来るか来ないかわからない殺し屋のせいで折角の食卓が崩壊してしまつては、元も子もないだろうに。ようは、我々が殺されなければいいだけの話だ。何をしようとも、何が起ころうとも、結果的に命が無事ならそれでいい」

「……いや、だから、命を保つためにどうするかつてことだろ？

……つてか、醤油くらいストックを買つとけ」

「醤油というのは、一人暮らしではそうそう使いきれるものではないのだ。一人暮らしを始めたばかりのお前も、あと半年くらい経てば身に染みて分かるだろう……」

訳の分からんことを、こちらをイライラさせるほどに達観したような口調で言ってくるロツト。

「醤油を一人で一升使い切ることに比べたら、暗殺者の刃を交わすことなど造作もないことだ。命を保つためには命を保てばいいという、それだけのことなんだからな。醤油を多量に消費する料理をわざわざ考案する必要もない」

…… お前の台所事情において、どれだけ醤油がネックなんだよ。

「結果がそうなつていればいい。そういう結果が残せばいい。それだけのことだ。私はそれ以外のものは何一つ求めんだ。所詮この世において、後に残るのは結果だけだ。結果しか残らないのだ。結果を残すからこそ、偉人は偉人足りえるのだ。歴史に名を残すことができるのだ。結果を出すことのみを念頭に置いて行動すれば、おのずと結果は得られるものだ」

「いや、だから――」

……いい加減、こめかみが痛くなってきた。

俺は額を手で押さえつつ、諦めたようなため息をつきながら、

「　　はあ。もういい。お前に相談した俺がバカだった。どうするかは個人に任せる。勝手にしろ。俺も俺で勝手にやるさ」

「まあ、そう悲観するな。バカもバカで、誰かに使役されることによつて物事の重要な場所に位置することもできるものだぞ」

「……誰がバカだって？」

「お前が自分で言ったのだろう？」

「……俺は皮肉のつもりで言ったんだよ。つまりだな、俺は自分のことをバカ呼ばわりしているが、実は本心では自分のことを至極まっとうな思考回路を持っている人間だと理解していて、さらにはそのまともな人間の予想を下回るクオリティの返答しかできないお前のことを見下していて、ようするにお前のことをこの上ないバカだと　　ええい、いちいち説明するのも面倒くさい！」

「まあ、お前の非生産的な話は置いておくとして、ようは、カザミドリ自体が消えてなくなってしまうばすべて解決するのだろう？　そうすれば、我々の命を狙う人間がいなくなるんだからな」

「……そう簡単に言うな。そんな容易に消えてくれるような集団なら、俺達だつてそこまで警戒してないだろ」

「ふふつ、そうでもないぞ？」

ロットは含み笑いしつつ、周囲にわらわらという賞金稼ぎの同業者を見回しながら、

「そもそも、今日我々　そして、このアステルのギルドに登録しているすべての賞金稼ぎ　が、朝の九時からギルドに呼び出されたのも、つまりはそういう　」

と、ロットの言葉が終わる前に、

カラントッカラント

ギルドのドアが開かれた。

その音に反応して、周囲の雑談がぴたりと止む。

その一瞬でできた静寂の中、入口からギルドの奥へとすたすた歩を進めてきたのは、黒髪に黒いコート、黒ぶち眼鏡に黒いハイヒ―

ルと、肌以外がすべて黒で埋め尽くされた、二十台と思しき女性。ギルド本部に属する、いわゆる公務員 リンクさんだった。

リンクさんは奥の壁際までたどり着くと、くるりと俺達の方へ振り返り、そして背筋をピンと伸ばした姿勢で高らかに、

「お早うございます、アステルギルドに所属する皆さん。ギルド本部のリンクです。本日はお集まりいただき、ありがとうございます。これから『カザミドリ殲滅作戦』について説明させていただきますが、話は長くなると思いますので、各々できるだけ楽な姿勢をとっていただいて、加えてメモの準備をよろしく願います」

この発言と同時に、周囲からがさそとカバンから筆記用具と紙を取り出す音が聞こえた。しかし、俺の正面のロットとルーはまったく動く気配がない。……メモは俺がとらねばなんのか。

俺はしぶしぶ、足元に置き放していたバッグからボールペンとペラ紙を取り出した。

リンクさんは、建物内の全員がカバンをかき回す作業を終えたのを見て取ると、

「……では皆さん、準備ができたようですので、説明を開始させていただきます まず現状ですが、この世界には昨今、『カザミドリ』と称される犯罪組織がびこっています。この集団の目的は、性能や可能性がまったく未知数であるアイテム『銀石』の入手のためならば手段を選ばず、彼らは窃盗から殺人まで、考えうる限りの犯罪を犯しています。総員は 推測でしかありませんが

一年前の時点で百数十人はいたのではないかと言われています。そして彼らは十三個の部隊に別れ、その集団ごとに活動しています

いえ、活動して いた と過去形で言う方が正しいでしょう。先月の作戦において、三番隊は我々アステルギルドが壊滅しました。それに加え、他所のギルドにより四番隊、六番隊、九番隊

そして一昨日、本ギルドに登録するアンディ氏とポーラ氏の共闘により、十二番隊を壊滅状態に追い込みました」

「おお……」

と、周囲から驚きと畏敬のこもった唸り声が聞こえてくる。

俺も少々驚いた。……いや、アンディさんとポーラさんの実力を知ってるなら、二人で一個隊を潰したことは何ら不思議ではない。俺は単に、一昨日にそんな事柄があったということに驚いただけである。

「よつて、現時点では二番隊、三番隊、五番隊、七番隊、八番隊、十番隊、十一番隊、そしてカザミドリの核である一番隊の、計八つのグループが残っていることになります。構成員の人数も、当初の半分程度には減っていると考えられます」

淀みなくつらつらと説明を続けていくリンクさん。こんなに一気にしゃべって、息が切れないんだろうか？ ……いや、俺なんかリンクさんを見かけるのは総じてこんな風到大勢に向かって説明しているところであり、慣れてるんだらう。

そんな俺の疑問など知る由もなく、リンクさんは眼鏡のブリッジを押さえつつ言葉を続けて、

「なぜこのように、最近我々のカザミドリに対する警戒・攻撃が強まっているのかと言うと、実はとある情報筋から、恐るべき情報が届いたからです。それは

カザミドリは、『銀石』の開発をすでに七割がた達成している
そしてその『銀石』を用いれば、複数の国を相手取って戦争
ができるほどの戦力を得ることになる

というものです。これを重く見た各国が、軍備の増強と共に、ギルドへの支援要請を始めました。つまり国からギルドに、カザミドリ壊滅に関する依頼が多数届いているということです。賞金首の賞金額が跳ね上がったたり、あるいはカザミドリに関する情報収集の仕事がいくつも届けられていたり。……別に我々ギルド本部は、あなた方に平和のため、犯罪組織殲滅のために戦ってくれと言えるような立場にはありませんし、言つつもりありません。しかしビジネス

スとして、あなた方に多数の高給な仕事を推奨していると考えています」

ここでリンクさんは一拍置き、核心に入るような声で、

「ではこれより、その仕事の詳細について説明させていただきます」

第三話

先日のリンクさんによる『カザミドリ殲滅作戦』の説明の後、俺達に任されたのは『調査員の搜索』なる仕事だった。

カザミドリに関する情報収集をしていた国の調査員が、一人、現在行方不明になっているらしい。この一週間、毎日行われていた定時連絡が途絶えているのだそうだ。これはカザミドリから何らかの攻撃を受けたのではないかと睨んだ国が、その調査員の行方の搜索をギルドに依頼してきたのである。

調査員の調査という、ある種冗談のような仕事。

しかしまあ、ギルドにおいてはよくあることだ。

ちなみに、その場所というのはコロノ山の奥地である。

ついこの間来たばかりの山ではあるが、今回の現場はそのさらに奥。あの時ロットが持ってた地図には載ってないような（もちろんあれはハイキング用の地図で、この山全体を網羅してるわけでもない）、一般人にはおおよそ用も縁もないようなエリアなのである。

この敷地の周囲は、柵で完全に囲われている。

電気が通った、高さ三メートルとかなり高めの柵である。

なぜこんな、人間には進入が未来永劫不可能なほど厳重な囲いがあるのかというと、実はこの場所は『石』の発掘現場なのだ。この辺りの地面には主に『赤石』が埋まっており、それを発掘・集積して、各地に輸送しているのである。

『赤石』は、流通量で言えば『石』の中で一番多いもの。

全流通品の中でも、上から五、六番目に入るくらい殊更なものなのである。

この場所を不届き者に荒らされてしまつては、商業や産業に大ダメージが起こる可能性も十分ある。だからこそ国もこの場所を柵で囲い、さらには警備員までも配置して、厳重に警戒しているのである。

いわば、城下町の次に監視の厳しい場所。

しかし数週間前に、この発掘所に関して妙なタレコミがあったのだ。その内容は「ここで採れた『赤石』をカザミドリに横流している輩がいる」というもの。

真実ならば即刻取り締まるべきことだが、あくまでこれは匿名のタレコミ。

確信の持てる情報ではなかったので、軍が大々的に動くわけにもいかない。大人数を裂くことはできない。そんなわけで国は、秘密裏に捜査するために調査員をここに送り込んだのだが

その調査員の行方が分からなくなった。

最後の定時連絡は、この『赤石』発掘所の中からあったらしい。

そこで俺達ギルドの賞金稼ぎが、その調査員の行方　あるいは、最低限その調査員が失踪した理由　を調べ上げることになったのである。

この調査に赴くメンバーには　これは比較的緩い仕事であり、ほとんど実績がない人間が選ばれるわけで　アステルギルドのティーンネイジャー組たる俺とロットとルー、ギーンとウエリイ（ただしワイトは義手を作っている最中で、メンバーから外れている）、そしてもう一人　情報屋のムツナが選ばれた。

実働人員は計六人。各々見知りあった人間である。俺達がムツナと組むのは初めてだが、まあ、特にサプライズもない。

なお、このチームの取りまとめたる責任者はアンディさんが任せられた。

アンディさんはアステルギルドにおける貴重な戦力で、カザミドリ関連の要請が氾濫している現在、彼が関わるべき重要な仕事は他にも多々あるし、こんな中途半端な仕事に帯同させるならもっと別

な人でもいいのではと思ったのだが　　本人に聞いてみたところ、今回のこれは、アンディさんにとっては休日代わりみたいなものなんだそうだ。出発間際には、

「くはは、またお前らのトリオ漫才を見れるたあ、楽しみだ」

なんていう、マコト失礼なことを言ってきた。傍観者は呑気なもんだ。俺の気苦労も知らないで。

まあとにかく、そんな人員構成で、

実に二時間山道を歩いた挙句、囲いの中の唯一の出入り口（もちろん警備員が待機している）を通してもらい、俺達は発掘所のエリアの中に入っていたのである。

柵の中に入ってまず俺達が向かったのは、この敷地のほぼ中心にあるロッジ。

ここを拠点として、これからの二日間、俺達は活動する予定である。

いつもは鉱員の方々の休憩所として使われている建物らしいのだが、俺達の遠征に際して、搜索に支障がないようにと彼ら全員に休日を与えられたのだそうだ。よって、十人以上が余裕で生活できそうなこの木造建造物を、俺達七人が完全に自由に使えることになったのである。

そんなただっ広いロッジにたどり着き、アンディさん主導の下でこれからの方針や時間配分などを決め、連絡用のトランシーバーを渡された後に、時間を無駄にするのもなんだしという感じで、

荷物を置いただけ　「ゆつくりしたい」とロッジの床にへばりつくルーを無理矢理ひっぺがして　俺達はさっそく搜索を開始した。

搜索のチーム分けはというと、アンディさんはロッジで待機、他

の六人で二人一組の三チームに分かれることになった。

分け方は、ロットとルー、ウェリイとギーン、そして俺とムツナというペア。ウェリイがロットと組みたがったこと以外、特に争うこともなく決まった。まあ予想通りというか、予定通りというか、とかく順当な組み合わせだろう。

俺としては、ムツナという割と常識的な人間と初めて組むことになり（アステルギルドの年少組の中でギーンに目をつけている辺りも、実に常識的な価値観を持つてると言える）、本件に関しては、ここ数年まれに見るほどに安心していた　　が、同時になぜだか物足りなさも感じてしまう。その原因は、俺には皆目見当がつかないが。

とにもかくにも、俺はそんな不条理な気分を抱えつつも、ムツナと共に捜査をすることになったのである。

他の五人と別れ、俺達のペアが任された南東セクションへ向かう途中。

俺の脇で心底わくわくしたような笑みを浮かべ、青紫のセミロングな髪を風に揺らしている、黒ローブ姿のムツナは、

「いやー、私これが初仕事なのよ。ドキドキするな」

と、初仕事に赴く最中とは思えないほど不安を微塵も感じさせない声音で言ってきた。

俺は愛想笑いの延長線上的笑顔を返しながら、

「そうなんだ。……というか、あんたもギルドに登録してたんだ？」

「うん、一応登録だけしといたの。ギーン君がどうしても首を縦に振ってくれないから、仕事はまだするつもりなかったんだけどね。

……ただ、マスターに人手が足りないからどうしてもってお願いされて、まあギーン君と一緒にならいいかって思って、今回は特別に受けたんだよ」

「へえ、そうなんだ」

俺は感心したようなイントネーションで答えつつ、

「……でも、これが初めてってことは、仕事の勝手が分からないだろ？ あんたは元々戦闘要員でもないわけだし、しかも今回のこれは力ザミドリ関連なんだからな。……まあ、何かあったときは迅速に助けを求められるよう、心の準備は常にしといた方がいいだろうね」

「あはは、心配してくれてありがと。……でもでも、私だってそんな足手まといにはなんないよ。情報屋を侮ってもらっちゃあ困りませ」

ムツナは相変わらずの楽しそうな微笑のまま、人差し指で天空を指差した。

「情報っていうのは、すべてにおいて何よりも重要なものだからね。たとえば敵の戦力や戦略の情報を手に入れて、逆にこっちの情報の流出を防げば、最低限の力で最大限の結果を得ることができるんだから。何て言ったら《てくのろじ》の時代には、情報の早さで商売の勝ち負けがついてたって話だし、国対国の競り合いも情報合戦だったっていうんだから。情報っていうのは、この世で一番重要なファクター。そしてその扱いに長けてる人間ってのは、どこでも重宝するものなんだよ。だからマスターも、わざわざ私をこのメンバーに加えたんだから」

青紫の髪を風になびかせつつ、鼓舞するように言ってくるムツナ。俺は感心九割、疑心一割程度の心境を抱えて、

「……へえ、そうなんだ」

「そうよ、そうなのよ。情報を独占すれば、世界征服だって夢じゃないんだからね」

本気が冗談か分からないようなことを、ニタリ笑いで言ってくるムツナ。やたらめつたら得意げな表情をしてくる。ここは笑えばいいのか感心すればいいのか俺が迷ったのは、ここだけの話だがね。

……まあ、そんな世間話でもって初対面に近いムツナとそこはかとなく親交を暖めながら、草を掻き分けつつ、獣道を行ったり来た

りしつつ、俺達は搜索を進めたわけだが、

捜査を始めて二時間後、

急に雨が降り出した。

山の天気は変わりやすいというそれなのか、それともただの夕立なのかはあずかり知らないが。

最初はぼつぼつという小雨だったが、数分もしないうちに大降りになってきた。

かなりの雨量。粒が大きく、頭に当たると少々痛いほどである。強い風も吹いてきて歩きづらく、しかも視界まで相当悪くなってきた。

これじゃあロクな捜査もできないし、しかも地すべりやら何やらで山歩きは危険だろうと思っていると、まるで俺の思考を見透かしたかのように、握っていたトランシーバーから、

『こちらアンディ。ちょっと雨が強くなってきたな。危ねえし、とりあえず捜査は一時中断して、みんなロッジに集まってくれ。そこでもう一度計画を立て直す。以上だ』

と、向こうのトランシーバーにも雨音が入っているせいだろう　　ザーザーというノイズ交じりで、そんな命令が届いた。

俺はムツナの方を振り返り、肩を持ち上げながら、

「……だつてさ」

「そうね。……風邪引いちやうし、早く戻ろ」

そう言つて、ムツナはロッジの方へとことこ歩き出す。

俺もその後を追いつながら、ふと、黒い空を見上げた。

どこまでも続く、暗澹とした雲。

雨は、まるで弱まる気配はない。

この雲行きは、どこまでもどこまでも怪しかった。

第四話

周囲の木々を切り倒して造ったような、純木製の平屋。

一般的な家の三、四倍くらいの広さで、くつろぎスペース、キッチン、浴室、個室が十部屋と、宿屋経営ができそうなほどに設備が整っている。事実、通常時は数人の鉱員達がここで寝泊りしており、食材やら日用品など、生活に必要なものはすでに揃っているのである。

雨足がいよいよ強くなり、風も吹き荒れてきた外から、俺とムツナは追い込まれるようにこのロッジの中に駆け込んだ。

玄関口、ずぶ濡れの靴を脱ぎながら中へ入ろうとした俺達に、

「はい、これ使って」

と、ルーがタオルを差し出してきてくれた。

「ああ、ありがとう、ルーちゃん。助かるう」

とそれを受け取って顔を拭い始めたムツナの横、俺も「サンキュー」と言いつつ同じようにタオルを手にとって、シャワーを浴びた後のような髪をごしごし拭き始める。

ようやく毛先から滴る雫が止まったところで、俺はルーに、

「もう、みんな来てるのか？」

「うん、大体来てるよ」

…… 大体？

その一言に引っかけかりながら建物の中を見回すと、アンディさんとウェリイ、ギーンが、すでに奥のテーブルでティーカップ片手にくつろいでいた。他の二ペアの担当場所は俺達のところよりも断然ロッジに近く、十分くらい前にはすでに着いてたんだろう。もしくは、雨が降り始めた時点でさっさと引き返してしまったか、だが

ん？

現在、ここにいるのは六人。今日の遠征メンバーは全部で七人いたはず。一人足りない。アンディさん、ウェリイ、ギーン、ルー、

ムツナ、俺とあと一人、ええと そうだ！

「 おい、ルー。ロットはどうした？」

「ん？ ああ、それがねえ 」

ルーは手の平を上に向け、「困ったもんだよ」というような顔を
して、

「 アンディさんから連絡があつた後、『私はもう少し調べたい
ことがある』とか言つてね、どっか行っちゃつたの。多分、まだ捜
索を続けてるんだと思う。あたしは『危ないから戻ろう』って言つ
たのにさあ」

…… 調べたいこと？

「あいつが雨天決行で仕事を継続するなんて、何かあつたのか？」

「さあ？ わかんない。…… あ、でも、さっき捜査してるときにね
え、ロットつてば、たまにあたし達の後ろの方を気にしてたよ？

まあ、気にしてただけなんだけど。でも、何回か後ろ振り返つてた
よ。あたしが振り返つても何も見当たんかつたのに。…… 気にな
ることつて、それかなあ？」

ロットが背後を気にしていた？ そして『もう少し調べたいこと
がある』？ …… まさか、監視か？ あいつが誰かにマークされて
たとか？

…… いや、それはない。ありえないだろう。

この発掘現場への出入りはちゃんと警備員に管理されてるし、あ
の柵を越えるなんて不可能だ。なんせ『赤石』やら『青石』なんか
で攻撃しても触れた瞬間にそれが灰になるほどの強力な電流を流し
てるし、『黄石』では無効果。しかも四重構造になつてて、『黒石』
を使ってですら五体満足なままじゃ破れないようになってる。国の
研究所が直々に開発した、完全なる遮断設備。このエリアに不審者
が入り込める隙間などあるはずもないんだ。

だから、ロットが不審人物に追跡されてるなんてことは、ありつ
こない が、つい先日イヴに宣戦布告を食らつたばかりだつ
てもあつて、どうにも一抹の不安は拭いきれない。

俺は、奥のイスの上でリラックスしているアンディさんに向かって、

「……アンディさん。ロットのようですが」

「ああ、分かつてる」

アンディさんはなだめるような表情を向けてきた。

「……しかし、あのロットのことだ。そう簡単にやられるようなタマじゃねえ。それにこの天気じゃあ、逆に探しに行った方が危険だ。ミイラ取りがミイラになりかねねえしな。とにかく、この雨が弱くなるまではここで待機していよう。あいつを探しに行くのは、その後でも遅くないだろう」

「……分かりました」

俺はそう答えながら、再びタオルで頭を拭き始めた。

俺の横につつ立ってるルーは、

「まあ、あのロットだもん。心配することはないよ」

「ふん、その青ガツパと同じ意見というのは気分が悪いですが、しかしその通りです。あなたが心配するまでもありません」

奥のテーブルからウェリイが話に入ってくる。

その「青ガツパ」という単語に反応してルーがウェリイの方を睨みつけ、部屋の中には『赤石』も『黄石』もないのに火花が飛び始めた。……やれやれ、またこいつらのくだらない喧嘩が始まるのか、と俺が憂慮したその時

ジジッ、ジジジジジッ

いきなり、この部屋に三つあるトランシーバーそれぞれから、耳に刺さるような雑音が聞こえてきた。

アンディさんは、その中の一つである自身の胸ポケットに納まっていたものをひよいと摘み上げると、

「はい、もしもし？」

『ここ、こちら、コロノ山発掘所、にゅ、入所管理局』

「おう、こちらアンディ。……どうした？」

『あ、アンディさん！ きき、緊急事態です！ し、しし、侵入者がありました！』

「侵入者あ？ ここにか？」

『は、はい！ 警備員の一人を刺殺し、そ、そのまま鉱山内へと入っていきました！』

「何人？」

『し、侵入者は一名！ くく、暗闇でよく確認できませんでした、十台半ばといった体躯の人間でした！』

「いつだ？」

『さ、三十分前です！』

「三十分前え？」

アンディさんは声を荒げ、

「何ですぐ連絡をよこさねえ！」

『すず、すいません！ き、救護活動を、しております……』

「そうか、そりやそうか………わかった。こっちはこっちで対策を打つから、そっちも警戒してくれ」

『は、はい』

その返事を聞くと、アンディさんは再度トランシーバーをポケットにしまった。

侵入者。

その不測の事態に、ここにいる六人の表情が一瞬固まる。ピリッと、一気に張り詰める空気。みながみな考え込むような顔をして、誰一人その姿勢のまま動かなくなる。

恐らく俺を含めた六人とも、ロットの安否を心配してるんだろう。この 侵入者 とロットが言った「調べたいこと」は、簡単にリンクする。

では、この侵入者は一体何の目的でここに侵入したのか？ なぜ

警備員を殺してまで侵入してきたのか？　そしてなぜロットを付け回していたのか？

正直、現在ある情報だけでは、その疑問への解答を出すのは至難だ。予測の域を出ない。だからこそ、それぞれ黙々と考え込んでるんだ。答えを探してるんだ。

そして誰も答えを発せないまま一分以上も無音が続き、いよいよ部屋の中に不安げな雰囲気漂い始めたところで、

ジジッ、ジジジジジッ

またも、三つのトランシーバーが鳴った。

今度は何の連絡かと、再びトランシーバーを耳元に持っていくと、

『あー、あー、こちらロットだ、どうぞー』

雨音交じりの、ロットの声だった。

六人の顔が強張り、受信機に視線が集まる。

しかしそんなこちらの緊張を察することもなく、電波の向こうのロットは、いつも通りの底抜けた声で、

『アステルギルドの諸君。六人とも無事か？　どうぞ』

『ああ、無事だ』

トランシーバーを口元へ持っていき、俺が答えた。

『……というか、お前は今何してるんだ？　早くこっちに帰ってこい』

『いや、それは無理だ。どうぞ』

『……無理？　お前今、何してるんだ？』

『ああ、実はな、これから私は

決闘をするところだ。どうぞ』

「け、決闘っ？」

俺は聞き返して、

「……って、一体誰とだ？」

『ああ、それがな』

と、向こうの無線機から、環境音に混じってロットではない声が聞こえてきて、

『ふはは。仲間に連絡か？ だったら遺言もちゃんと残しておいたほうがいいぜ。なんせ、それがお前の最後の会話になるんだからな』
耳障りの悪い、卑しくいやらしい、どこまでも陽気なイントネーション。嫌になるほど聞き慣れたこの声は イヴ！

「おい！ その声、あいつなのかつ？ 決闘って、そいつと殺りあうってことかつ？」

『ああ、まあ、そういうことだ。というわけで、私がそちらに帰るのはもう少し遅れる。だからちよつと待っていてくれ。どうぞ』

「ってか、大丈夫なのか？ お前、勝てるのか？」

『ははは。愚問だな。前も言った通り、私は結果以外は何も求めない。そして現在の私は、こいつに勝利するという結果のみを求めている。だから、私が生き残る以外の結果は生まれるわけもないのだから安心しろ』

「……って、だから、そんな理の適わない理論じゃなくて、そいつと戦って実質的に勝算があるのかって」

『ではでは、皆の衆。朗報を寝て待っているがよろしい、どうぞ』

ジジッ

それだけ言って、トランシーバーの音が途切れた。

なぜイヴがここにいる？

なぜイヴがロットという？

なぜロットに勝負を吹っかけた？

状況整理に頭が追いつかず、混乱が頂点に達する。

ルーとウェリィが、心もとなげな顔で、俺が握っているトランシーバーをじつと見つめてくる
が、俺はそれに向ける言葉が

見つからない。

これからどうすればいいのか、どういう行動に出るべきなのか、俺が判断を仰ぐようにアンディさんの方を見上げると、

「……ちっ、しょうがねえよ」

アンディさんは、なおも大降りの窓の外を眺めながら、

「この雨じゃあ外に出ても危険だし、今から行ってもあいつらの戦闘に間に合うわけもないだろう。……………今はただ、あの野郎を信じて待つしかねえな」

第五話

どうやらこの悪天候は通り雨の類だったらしく、十五分後にはだいぶ弱まってきた。風もほとんど止んで、視界もそこまで悪くない。次第に暴風雨から通常の雨降りへと変遷していった。

しかし、ロットからの連絡はまだない。

……これは、戦いが長引いてるのか、それとも、もしかしてロッジ内にそんな不安が渦巻く中、いよいよルーとウェリイがいとも立つてもいられないようにソワソワし始めたところで、アンディさんが窓を開けて外を確認。ここであろうやく、

「……よし。ロットを探しにくぞ」と許可が下りた。

それを聞くや否や、焦燥した表情で一目散に外へ飛び出すルーとウェリイ。アンディさんの

「おい！ カザミドリが潜んでるかもしれないから、慎重に行けよ！」

という注意も、果たして二人に届いたのか疑問なほどに、つむじ風のように駆け出して行ってしまった。

「……ったく」

その背中を見送りつつアンディさんは嘆息して、俺達の方を振り返りながら、

「とにかく、俺達も行くぞ。お前達も十分注意しろよ？ ……あと、あいつがここに帰ってくるかも知れねえから、とりあえずムツナはここで待機してろ」

「了解です！」

敬礼まがいの仕草をしながら答えるムツナ。

ムツナにロッジを任せ、アンディさんに続いて俺とギーンもロッ

ジを出た。

そしてドアの前に立ったアンディさんの

「じゃあ、俺らも手分けしてロットを探すが、もし見つけたらトランシーバーで連絡すること。いいな？」

という指示に、俺とギーンは「はい」とハモリながら答えて、三方に散った。

そして、雑草を蹴散らして山狩りをしている最中、トランシーバーにアンディさんから連絡が入ったのは、ロッジを出てから三十分後のことだった。

『……全員集まれ。場所は、北東エリアの北端の崖のところだ』

という指示に従ってその場所に行くと、すでに俺以外の全員

アンディさん、ルー、ウエリイ、ギーン、ムツナ が集まっていた。何やら落ち着かない様子で、みんな一方向へ視線を向けている。

俺がそちらへと駆け寄ると、俺に気付いたルーが手を振りながら、

「あっ！ ダルク！ こっちだよ！」

「ロットはいたのか？」

「うん。多分……いた。だけど」

歯切れの悪い返事をするルー。

「あれだと思っただけど、その、遠くて確認できなくて……」

そう言いながら、ルーはちらりと視線を横に泳がせた。

ルーの視線を追っていった先には谷がある。九十度に限りなく近い絶壁。とても人が簡単に上り下りできるような角度ではなかった。斜面ではなく、万人をして崖と言わしめるものである。

その谷底は、かなり深い。

下の地面に生えている木々もかろうじて見えるが、それはもはや砂粒よりも小さい程度。高低差は三、四百メートルくらいだろうか。覗き込むだけで目眩がしてきそうな深さである。

そして前方百メートル程先、ぽっかりと穴が空いたような谷の中

に、台地がある。

この谷を海に例えるなら、浮島のようなものだ。

その台地はちょうどこちらと同じくらいの高さである。もし陸続きだったなら段差もなく渡れるだろうというくらい、ちょうど真正面にその陸地はある。しかし、こちらと向こう側にはかなりの幅があり、とても直接跳んで行けるような場所ではなかった。

そしてその台地の上、地面に 何か が横たわっている。遠過ぎで、『地面の上に何かが積まれている』ということがかるうじて分かる程度のものだが

「……あれ、遠くてよく見えないけど、多分、人……だよね？ もしかしたらあれがロットじゃないかって……」

よぎる不安に声を震わせながら、ルーが俺に説明してくる。
と、

「ロット様っつ！」

さつきから一生懸命台地の方へ目を凝らしていたウェリイが、手で筒を作って、その横たわったものに向かって叫んだ。

しかし、それ はまったく反応しない。ピクリとも動かない。

動く気配がない。かすかな山彦が返ってくるだけだった。

再度、ウェリイは

「ロットさーまっつ！」

と叫んでみたが、やはり同じだ。リアクションがない。

俺の隣に立っていたグリーンがアンディさんに、

「……ここ、渡れないんですか？」

「ああ、一応ここにはつり橋が架かってたんだが」

答えながら、アンディさんはすたすたと崖の淵の方に歩いていった。

そこには、地面に突き刺さった木の杭と、それに巻きついているロープがあった。その巻きつき方は頑丈そうだが、その片端は途中で切れている。力任せに引き裂かれたように、ブチブチにちぎれていた。

ギーンはそれを見つめながら、

「……それは？」

「つり橋の成れの果てだ。ロープが引きちぎられてる。恐らく、さっきの風雨で飛ばされたんだろう」

「じゃ、じゃあ、どうやって あれ を確認するんですか？ 向こう岸に渡らなきゃ、ロットさんかどうか確認が」

「……まあ、強行策でいくしかないだろうな」

そう答えながら、アンディさんはおもむろに肩に掛けていたバッグからするとロープを取り出した。

結構太めの頑丈なヒモ。一体それで何をするつもりなのかと眺めていると、アンディさんはそのロープの片方を結んで輪っかを作り、次いでその逆の端を握ると、カウボーイよろしく頭上でぶんぶん振り回し始めた。

何となくこのあとの展開が予想できてきた俺の目の前、アンディさんがそのロープをぴゅっと前方へ放り投げると、その輪っかは谷を飛び越え、向こう岸の地面に埋まった杭にホールインワン。谷に一本の線がかかった。

杭がしっかりと固定されているのを確かめるようにぐいぐいとヒモを引っ張っていたアンディさんは、ふいに俺とギーンの方を振り返ってきて、

「……どうする？ 結構丈夫なロープだから、数人分の体重にも耐えられると思うが……お前らも来るか？」

「あ、あたし行く！」

「わ、わたくしもいきますわ！」

ルーとウェリイが身を乗り出して手を上げてきた。

なんつー度胸だ、これも愛の力だろうか、と俺はただただ感心していたのだが、アンディさんは首を横に振って、

「……いや。お前らの細腕じゃ、登るのは無理だろ。落っこちたらジ・エンドなんだからな。確認作業は、とりあえず男に任せとけ

ってことで、どうする？ ダルク、ギーン」

再度俺達のほうへ顔を向けてくるアンディさん。

…… ロットが心配なら、ルーやウェリイのように率先して行くのが当然のような気がする。が、しかし、正直なところ、この高さはさすがに怖いし……。

と、風渦巻く谷底を覗き込みながら俺が返答を迷っていると、

「あ、はい。行きます」

俺の脇、ギーンが躊躇なく答えた。…… 答えてしまった。

その返答にこくりと頷き、三度俺の方を見てくるアンディさん。年下にこんな先手を打たれては、年長者として、人生の先輩として、拒むことなどできるはずもなく

「じゃ、じゃあ、俺も」

と、俺も答えた。…… 答えてしまった。

アンディさんは一つ頷くと、俺とギーンにもロープを握らせ、「絶対離すなよ？」

という一言と共に、心の準備をする猶予も神頼みをする時間も遺言を残す暇もくれないままに、あっけなく地面を蹴ってしまった。

アーアー、なんて叫ぶ余裕もなく、俺とギーンとアンディさんは、谷底からおよそ数百メートル上空を振り子のように斜め下に飛んでいき、垂直な地面にスタンと着地した。

一応谷を渡ることができたことに安堵したのも束の間、

「はれ、早く登るぞ」

と言って、アンディさんはすいすいとロープを伝って上へ登っていつてしまう。

それに続いて、ギーンも軽快そうに登り始めていった。

俺は、眼下に広がるまるで地獄のような地底に身震いしながら、「これ…… 上の杭は抜けたりしないんですか？」

「くはは。そんな心配ねえよ。なんせ橋を支えてたんだから。それなりに丈夫なはずだろ？」

「そ、そうですね」

俺は取り繕うように答えつつ、この恐怖を脱するには早く登るこ

とが先決だということによろしく気づき、ロープを伝い始めた。

登りながらチラリと下方を見ると、地面は目を凝らさなければ見えないほど遠い場所。今さらながらこの手を離れた瞬間に俺の人生は終わるということに考えがいたり、いよいよもって寒気がしてくる。俺はどうにかこうにか思考を別方向に向けようと、目の前をずんずん登っていくギーンの背中に向かって、

「……な、なあ。ここって一体どういう場所なんだ？ どうにも、特別な地形みたいけど……」

「いや、まあ、見ての通りの崖なんですけど」
ギーンは少しだけ首を回して、

「何でも、千年以上前に起こった地震でこうなっただけです。その頃は地元民族の儀式の祭壇として使われたり、あるいはその名残で罪人の断罪に使われたりもしたそうですよ。……ただ、この『赤石』の発掘が始まってからは、誰も寄り付かない場所になってたんですが、ね」

含み笑いのような苦笑いのような顔で説明してくるギーン。

この辺りの歴史について俺はまったく詳しくないが、何やらいくつきの場所らしいことは分かる。こんな歪な地形があれば、何か宗教的意味を押し付けたいくなるのも理解できないでもない。……まあ、イヴはそれを知って決闘の場としてここを選んだのかどうかは、俺の知ったことではないが。

そんなことを考えつつ、えっちらおっちらとロープをたぐる
こと数分。

手が痺れてきた場合でようやくたどり着いた、天空の離れ小島。

地面が水平であることがこんなに幸せだったとは思いながら台地の中ほどへ進むと、俺より数分先にこの地面にたどり着いていたアンディさんとギーンが、立ったまま動かなくなっていた。

「一体どうしたんです？」

と尋ねつつそちらへ近づいていき、二人の視線の先に眼を遣ると
そこに横たわっていたのは、赤い水たまりの中、大剣『グ
レン』を右手に握り、その鞘を背中に掛け、白いフリースに黒ズボ
ンという、ついさっきまでロットがしていた服装とまったく同じも
のをまとった

首のない死体だった。

第六話

日はすでに暮れている。

というより、今現在はもはや深夜だ。あの空中小島からこのロツジに引き返してきてからすでに六時間以上が経っており、今現在、俺以外の五人はすでに眠りにについているのである。

では、俺は寝ないで何をしているのかと言うと、見張りだ。

俺はルーとウェリイが寝ている部屋の扉の前に座り、二人に異常がないか見張っているのである。

そう　「ロツトが死んだ」と聞かされた時、ルーとウェリイは尋常ではない反応を示したのだ。詳しく描写して気分のいいものではないので細部までは述べないが、ようは、ルーは泣きわめき呼吸困難を引き起こして卒倒し、ウェリイにいたっては錯乱して腕や頭や首などを自身の爪でもって自傷を始めたのである。

それを、アンディさんが薬で無理矢理眠らせて止めた。

そうでもないかと、止まらなかった。

そのおかげで、今の二人は落ち着いている　強引に落ち着かせている。目を覚ませばまた同じ行動をすることは目に見えてるが、しょうがない。少しずつ少しずつ、受け入れてもらっしかない。

……もはや、それしかない。

こういう状況になって、改めて理解した。

あの二人にとって、どれだけロツトが重要な人間だったか。特別な存在だったか。普段のくだらないじゃれあい見ている限り、腐れ縁的な仲でしかないと思っていたのだが、そうではなかった。それだけではなかった。ロツトは、あの二人の心の中の深い場所にいたんだ。……別にだからと言って、卒倒も自傷もしなかった他の四人がロツトを軽んじていたとも言わないが。

ただ、アンディさんは大人であり、数々の修羅場をくぐってきた賞金稼ぎであり、人死ににいちいち取り乱すような年齢でもない。

取り乱さない方が自然だろう。

ギーンは あれだけ冷静な人間だ 内心では混乱しているだろうが、なんとか平静を保っている。

ムツナは、ロットとの付き合いは至極短い。そこまで感情移入するにいたってないのだろう。

そして俺は まあ、俺は そういう道 の上にいる人種だから。今さらそこまで派手なりアクションをするような人間じゃない。普段より少しばかり口数が少なくなる程度だ。

ふと、俺は脇の壁に立てかけてある大剣を手にとった。

ロットの愛用武器『グレン』。あの現場から拾ってきたのだ。

自分の腕で持ち上げてみて改めて思うが、やはり重い。細めの丸太くらいの重量はあるだろう。ロットはこんなものを年中背負い、そして振り回していたのか。

あいつがこの剣に炎を灯した光景を思い出す。

これで敵を成敗したことは、一体何回あっただろう？

俺達を守ってくれたことは、一体何回あっただろう？

逆に俺が切りかかれたことは、一体何回あっただろう？

そしてそして、思い出す。

前回の仕事で、コロノ山に向かって出発する朝に、ロットが俺に言ってきた言葉。

「もし私に何かあったときは、これをお前に譲ってやってもいいぞ」

……まさか本当に俺がこの剣を手にする日が来るなんて。

あれは あの言葉は、冗談でしかないと思っていたのに。少なくとも俺にとっては、ただの冗談でしかなかったのに。

ロットにとってもただの冗談だったと思っていたのに。

何てこの世は 因果なんだ。

と、

トスン、トスン、トスン

暗闇の廊下の向こうから、スリッパの音が聞こえてきた。

手元のランプをかざし、誰が来たのかとそちらを見やると、赤く照らし出されたのは青紫のセミロングヘア。ローブのような寝巻きをまとったムツナだった。

ムツナは不安げな表情で、

「……どう？ 中の二人？」

「ずっと静かなもんさ」

俺は何ともなしに答える。

ドアの前に立ち、扉の木目を不安げな顔でしばし眺めていたムツナは、ふっと思ひ直したように、俺の隣に腰を降ろした。

「……でも、まさかこんなことになるなんてねえ」

「ああ……まったくだ」

俺はうつむき加減で同意する。

「でも、その……私、少し引っかかってるんだけどさ」

「……何？」

「ロット君、本当にイヴァリーに殺されたのかな？」

「……当たり前だろ。あの状況を見る限り。あの丘の上で二人は決闘し、ロットは負けた。首を切られてな。恐らく、頭は崖の下にでも落ちたんだろう。そしてイヴはあそこから立ち去り　しかし風はまだ吹き荒れてたから　その後、あのつり橋が落ちたんだ」

「……本当に、そうかな？」

「そうだろ。ロットがああ丘の上にいたことから、二人の決闘が行われたのはつり橋が落ちる前、雨が降ってる最中だ。その間にこの柵の中にいたのは、俺達六人とロット、そして入り口の検問を力づくで突破した一人の侵入者　イヴだけだ。警備員はずっと入口の待合所でチェック作業をしてたし、雨が降ってる間俺達はずっとこの小屋の中にいた。ロットを殺れる人間はただ一人。イヴってことになるだろう。『橙石』も使われてなかったし、何よりも、あ

の首は『黒石』の刃で切られてた。そういう切り口だった。それが何よりの証拠だろう？」

「そっか……」

ムツナはあごに手を遣りこくりと頷いた。

「……でも、何でイヴァリーは首を切ったんだろう？」

「そんなの決まってるじゃないか。急所だからだろ　　というか、何であんたはそんなに疑ってかかってるんだ？　まさか俺達を疑ってるのか？　それこそ、意味が分からないだろう。俺達にとっちゃ、ロットは付き合いが長い仲間だったんだ。ルーとウエリイの取り乱しようを見ればわかるだろ」

「うん、そうだね」

ムツナは寂しげな笑顔を浮かべ、

「うん……私にも分かるよ。大切な人がいなくなるって、辛いよね」

「何だよ、急に……まさか、お前も？」

「うん。少し前なんだけどね。お父さんが……死んじやったの。あの時は本当に……辛かった」

声のトーンを落としながら、膝の中に顔を埋めるムツナ。

「……結局ね、人の世界っていうのは大切な人だけで出来てるんだよね。世界中には何千万って人がいるけど、それってただの背景でしかなくてさ、私達の世界っていうのは、それぞれにとって大切な人だけで構成されてるんだよ。だから、その大切な人がいなくなる、消えちゃうってというのは、その人の世界自体が壊れちゃうことと同じなんだよ」

俺は黙って、ムツナの言葉を聞き続ける。

「世界が壊れるっていうのは、すごく痛い。心に痛い。苦しい。自分がずっと大切にしてきたものが、自分が生きてきた証が、自分の生き方自体が、自分の存在自体が、自分の世界が、なくなっちゃう　　なくなっちゃったみたいに感じる。ずっと側にあったはず

の笑顔が、優しさが、消えちゃう。今まであったはずの幸せが、希望が、消えちゃう。そういう存在がいたから、いくら大変なことが

あつても生きてこれたのに、乗り越えて来れたのに。……それが消えちゃったら、後には絶望と苦しみしか残らない。それは、すごく痛い。心に痛い」

ムツナはついと顔を上げ、俺に哀願するような表情を向けてきた。「……だからさ、二人のこと、ちゃんと見守ってあげてね？」

そう言つと、ムツナはふらりと立ち上がり、

「じゃ、おやすみ」

廊下の奥、闇の中に消えていった。

離れていくスリッパの音も聞こえなくなり、俺は再び廊下に一人きりになった。手持ち無沙汰になり、何ともしに今のムツナのセリフを反芻していると、

きいっ

背中ドアが開いた。

驚いて振り返ると、そこから顔を出したのは、生気の薄い顔をし

た　　ルー。

「……ルー、大丈夫なのか？」

「うん、もう平気」

あまり平気ではなさそうな、いつもより数十段低いトーンで答えつつ、ルーは部屋の中から這い出してきた。そして俺の隣にちょこんと座り、

「……ごめんね、迷惑かけて」

「別に迷惑なんかじゃない。しょうがないさ」

俺はなだめるように答えた。

ルーはちらりと俺の顔を覗つて、

「……でも、ダルクは冷静だよな」

「そう、か？」

……いや、確かに、今までずっと一緒にやってきた仲間の死に直面した人間としては、薄い反応だったかもしれない。冷静すぎたかもしれない　　だがやはり、死体を目にしたからといって、俺は錯乱しようとも思えないのが正直なところである。

俺の両親も、叔父叔母も、従兄弟も、人を殺して生計を立てていたんだ。

いくら実地経験がほとんどないとはいえ、服を赤く染めたラキを玄關で出迎えたことは数え切れないほどある。手についた血を洗面所で洗い流しているラキを眺めていたことも数え切れないほどある。排水溝の赤い汚れを掃除したことだって数え切れないほどある。

だから俺は、今さら血の海を一つ見せられたからと言って

と、俺はそんな思考を振り払うように首を振って、

「いや、冷静に……見えるだけだ。みんながみんな混乱してる。俺だって混乱してる」

「……そっか、そうだよな。ごめんね。当たり前だよな。人が死んで悲しくないわけないもんね。ロットが死んで、何とも思わない、は、ず」

いきなりルーの声が震え始めた。

驚いてルーの方を見ると、目の焦点が合っていない。瞳孔が開ききっている。体中が、寒がるようにガタガタと震えている。

「ロットが、死……ロットが、死ん……ロット……ロットが、死……」

……ロット……ロット、ろつと……」

「お、落ち着け！」

俺は慌ててルーの肩を抱き寄せた。

そして睡眠薬がないかと周囲を見回したところで、いきなり、ルーが俺の懷に顔を押し付けてきた。

しがみ付かれて、動けなくなる俺。

「……やだよ、やだよ……ひぐっ……やだよ……ロットがいらないなんて……やだよ……ロットが……うぐっ……ロットが……いらないなんて……」

俺の胸元、ルーはくぐもった声でわめいている。

「もうやだ……やなの……っぐ……何で、どうして……ロットが……死ななきゃ……ならないの、うぐっ……もう、やだ……やだよ……やだよ……」

ルーは、俺の服を濡らしながら、

「……もうやだ。パパも……ロットも……大事な人がいなくなるのは……いやだ。……あたしの周りからいなくなるのは……もうやだ。……もう二度と……誰も……いなくなつてほしくない。……誰も失いたく……ない。……ないのに。ひぐつ……ダルクは……ダルクだけは……もう……あたしのそばから……いなくならないで……え」
……かける言葉が見つからない
見つからず、代わりに俺は、眼下のルーの頭をそつと撫でた。

と、ルーは瞳に涙を溜めたまま顔を上げ、
「ねえ、ダルク……」

……ギルド……辞めよう？」

「……え？」

「……だって……あたし達がカザミドリに遭つたのも……ギルドに登録してたからでしょ？ ギルドの仕事……してたからでしょ？

こんなの……危なすぎるよ。だから……止めよう？ 止めて……一緒に別な仕事して……静かに暮らそう？」

「……い、いや、ただとお前は、ギルドで経験積んで、情報を集めて、父親を探し出すのが目的だったんだろ？ 目標だったんだろ？ ギルドを止めたら、それが叶わなくなるんじゃない」

「ダルクの方が大事だよ！」

ルーは、訴えるように叫んだ。

「もう……もうやなの。大切な人がいなくなるのはやなの。ダルクにはいなくなつてほしくないの。危ないことしてほしくないの。ずっと一緒にいたい。ずっと側にいてほしいの。だから……ギルド辞めよう？ 辞めて……一緒に別な仕事しよう？」

そう言つて、すがりつくように、再び俺の腕の中に顔をうずめて

くるルー。

……ギルドを辞める、か。

いや、確かにこれが普通の反応なのかもしれない。普通の結論なのかもしれない。続ける気にならないのが普通なのかもしれない。しかし

あの台地で、死体を前に、アンディさんが俺達二人に言ってきた言葉。

『これを知った時、あいつら特にルーとウェイがどういう反応するかは、大体予想がつく。多分、見てる方も苦しくなるようなことになるだろう。……ただ、お前らだけは降りないでくれ。カザミドリを討つために、お前らだけは戦い続けてくれ。頼む。この通りだっ』

そう言ってアンディさんは、子供でしかない、新米でしかない、自分の半分程度しか生きていない、人生経験すらままならない俺達に、深々と頭を下げてきた。世界に名だたる賞金稼ぎが、俺達に懇願してきた。

そこまでされたら、俺は、俺は

俺はため息をつき、ルーの青色の後頭部を見下ろしながら、

「……分かった。考えとく」

第七話

時間に感情はない。

良心も悪心も、喜怒哀楽すらない。

ただ淡々と、刻々と、流れていくのみ。

どんなことがあると、その流れは変わらない。

つまりは、そういうことなんだろう。

あんな出来事があつたというのに、世界は変わらず回っていく。俺達とはおおよそかけ離れた場所にある社会の主軸は、何の影響もなく今日も今日とて今日を始める。その流れは変わらない。変えられない。変えられやしない。

もっとも、ルーやウエリイには十二分を過ぎるほどに感情があり、そう簡単に立ち直れるはずもない。動く気力があるはずもない。動けるわけがない。

だから、二人は現在自宅療養中である。

家にこもり、必死に精神を安定させている。

しかしそれでも時間は過ぎ、社会は回り、つまりはギルドの依頼も止むはずもない。そして社会で生きる以上、その仕事を止めるわけにもいかないのである。

だから俺は、今日もまたギルドの仕事を請け負い、外へと繰り出すことになる。同じような状況であるギーンと共に。

つまり俺は、二人が立ち直るまでの間限定で、ギーンと二人のチームを組んだのだ。

昨日のうちに次の仕事も決定。今朝方八時にギルドで待ち合わせをし、そこから馬車停留所へと、ギーンと並んで歩いている。こい

つとのツーショットなんていうのは恐らくこの前遺跡を散策した時以来だろうが、まあ、別段やりづらいたんていうこともなく、特に不満はないがね。

俺は、すました顔で隣を歩くギーンをチラリと見やりながら、

「……しかし、まさかお前と組むことになるとはな」

「ふふふ。そうですね。僕も驚きました」

苦笑のような愛想笑いのような顔をするギーン。

「まあ、僕としてはこれはこれで新鮮で面白そうなのでいいんですがね。……僕自身が聞くのもなんですが、あなたはよかったんですか？」

「……正直、ルーが立ち直るまで休むっていう選択肢もあつたんだがな。あいつの面倒も見てやらなきゃならないし」

「そうですね。僕もお姉ちゃんのこと見てなきゃいけない気もするんですが」

「……いいのか？」

「はい。ワイトさんもいますし、それにムツナさんもちゃんと見ておいてくれると言ってくれたんで」

ムツナ？ ……やけにルーとウェリイのことを気にかけてくるみたいだが

「あいつ、そんなに面倒見がいい奴なのか？」

「さあ？ 一年ちよつとの付き合いなので、そこまで深く彼女のパーソナリティは知らないんですが」

ギーンは首を傾けつつ、

「ですが、半ば強引に『私が看病してあげる！』って押し切られてしまってます。しょうがなく任せてしまいました。ルーさんの方もちよくちよく見に行くと言っていましたよ というか、ダルクさんの方は気持ちの整理はついてるんですか？」

「リンクさんが推してくるもんだから、仕方なく請負ったって感じだ」

「僕も同じ感じです」

ギーンは軽く嘆息しながら、

「……ですが実はリンクさんは、こういう状況になる前から、僕とあなたを組ませたかったみたいですよ？」

「俺とお前を？ 何でまた？」

「リンクさん曰く、年少組の中で僕たちは特にムラがないんだそうです。ギルドの仕事において、常に同じクオリティを達成していくのは重要なファクターですからね。僕とあなたはその点において秀でているということなのでしょう。この前なんか、リンクさん、『ギーン君とダルク君が組んで私が育てるなら、世界屈指のチームにすることも可能よ』とまで言っていましたよ。……どこまで本気なのか分かりませんが」

「……そりゃまた、大きく出たな」

俺は半ば呆けながら答えた。

……いやまあ、あの人がギーンに目をつけるのは分かる。この年でギルドに関するほとんどのことに精通し、どんな状況でも物怖じしない状況分析能力を持っている。そこら辺にいる平の賞金稼ぎと比べても、能力が突出しているのだ。こいつの将来に期待してしまうのも、無理のないことだと思う。

しかし、その相方がなぜに俺なんだ？

ロットではなく、なぜ俺なんだ？

……もしかしたら、観察眼の鋭いあの人のこと、俺の裏の顔である『闇鳥』についても、少なからず気付いているのかもしれない。確信はなくとも、何となく感じているのかもしれない。俺が道を逸れていること。アンディさんが最近やたら俺に構ってきたりと、そういう兆候はあるだろう。

まあ、証拠さえなければ、当分は確証は持たれないはずだ。

一応は大丈夫なはずだ。

大丈夫なうちは、仕事を続けさせてもらおう。

いつまで続くのかは知らないが。

と、そんなことを考えながら歩いているうちに、ようやく停留所が見えてきた。

果たして空いている馬車はあるのかと思いつながら馬車の方へ近づこうとして、ふいに、その手前の木陰から、人影が幽霊のようにすっと現れてきた。

慌てて立ち止まりつつ、一体全体何者だと視線を向けると、

それは ウェリイだった。

いつもの見慣れた黄色いドレスを身につけながら、しかし パーマをかけてないんだろう ただの金色ロングヘアーの髪型をしたウェリイが、俺達の前に現れた。

「お姉ちゃん！ どうしたの？」

驚いた顔をして、ギーンがそつちへと掛けていく。

ウェリイは、いつもの瞳の強さが微塵もない顔でギーンに「……ちよつと」と答えると、今度は俺の方に顔を向けてきて、

「ごきげんよう、ダルク」

「え？ あ、ごきげん……。よう……。というか、どうしたんだ、お前？ まさかお前も着いて来るのか？」

「……いえ、まだ気分があまり優れないので、それは無理です。着いていっても足手まといにしかないでしょう。ただ 」

いつもの二割にも満たないような声量でそう言いながら、ウェリイはギーンの肩にそつと手を置き、

「 私が着いて行けないので、弟の面倒をちゃんと見ていただくよう、お願いしようと思ひまして」

「め、面倒って！ そんなこと言うために来たんですか！ お姉ちゃん！」

ギーンは顔を真っ赤にして、見たままの過保護な姉に反抗する弟の表情で、

「僕もいつぱしの賞金稼ぎなんだから！　いつまでも子ども扱いしないでください！　もう！」

「……まあ、俺もパートナーとしてできる限りサポートするし、ギンもできた奴だ。そう心配することもないだろう。……それに、今回の仕事はただの荷物運びだ。危険なんて何もない。お前も安心して療養してろ」

「そうだよ、お姉ちゃん！　さ、僕は早く馬車の手配しなきゃならないんだから。お姉ちゃんもさっさとウチに帰って、休んでください！」

ぷいっとそつぽを向いて、ギンは停留所の方へさっさとして行ってしまった。いつものこましゃくれた態度とは違って、いつになく子供っぽい感じのギン。まあ、なかなか微笑ましい姉弟関係と言えべきか。

俺は、ずんずん離れていくギンの背中を立ち尽くして眺めているウェリイに、

「……ま、そういうわけだから。この前のことで心配になるのも分かるが、弟のことを信じて待ってるよ」

「ええ、そうですね。弟のこと、よろしく頼みます。それから」

「

ウェリイは、今まで聴いたこともないような弱々しい声で、

「このようなこと、わたくしがあなたに頼める義理はないのかもしれないが、しかし」

「何のことだ？」と俺が返答する間もなく、いきなりウェリイは俺の腕を掴んできた。

「お願いします……お願いします！　わたくしの一生で一度の願いです！　いつでもいいです！　いつでもいいですから、いつか、いつか」

ロット様の仇をとってください！」

……か、仇っ？

「……以前からあいつの存在を知っていたわたくしが前に止めていれば、こんな状況にならなかったのかもしれませんが。わたくしに責任があるのかもしれませんが。……でも、本当のところ、わたくしにはどうしようもなかった。わたくしには……なす術がなかった。実際今まで三度、あいつに勝負を仕掛けたこともありましたが

すべて一秒足らずで勝負が決まってしまいました。……いえ、勝負にすらなりませんでした。勝負と呼べるものではありませんでした。ただ顔見知りだという、それだけの情けで、私はあいつに殺されなかったに過ぎません。生かされていたに過ぎません。……もうわたくしには、あいつを目の前にしても、平静を保って必死に身震いを押し殺すことしかできませんでした。どうしようもありませんでした。……しかし」

ウェリイは、俺の腕に顔をうずめてくる。

そしてその白い首筋が目に入って、改めて俺はその首筋や手、腕のあちこちに傷があるのに気付いた。透き通るような肌の上に、赤い筋が何本も浮かび上がっている。爪で引っかいたような傷跡。あの日あの時ウェリイが、無意識に　あるいは心の痛みを鈍らせるために　自分で自分を傷つけた、その名残……。

「しかし、あなたなら　あいつを目の前にしてそれでも物怖じせず、正面から啖呵を切れたあなたなら　もしかしたら、あいつを止めることができるかもしれない。あいつを殺すことができるかもしれない。……無責任な願いだとは重々承知しています。対価は何でも払います。わたくしのためじゃなくいい。ロット様の……」

……ロット様のために　どうか、仇を討ってください！」

叫ぶようなわめくような、ウェリイの懇願。

痛いほど、俺の腕を握り締めてくる。

濡れた袖口が、冷たかった。

第八話

今回の仕事は『手紙の受け渡し』。

現在『カザミドリ殲滅作戦』において暗躍しているとある人物と、指定された場所で接触し、ブツを渡し受け取るという、それだけのミッションである。

ようは、ちよつと遠出のお使いのようなものだ。

周囲に最低限の警戒をしていれば、それだけで事足りる仕事。自分から首を突っ込んだり足を踏み外したりしない限り、難点はまったくない。まあ、俺達のような新米賞金稼ぎが任される仕事の危険度などこの辺りが関の山で、この前のコロノ山での搜索は、ただ単に運が悪かったというより、奴らに目をつけられていた俺達に原因があっただけだ。

ちなみに、その「指定された場所」というのは、グランデル山である。

これまたこの前来たばかりの場所であるが、しかし賞金稼ぎというのはひっきりなしにあちらこちらへ移動する仕事であり、逆にこの周辺で言ったことがない場所は皆無に近いので、たいてい偶然だとも思わない。一年もこの仕事をしていれば、むしろ行ったことのない場所に出向く方が珍しいのである。

ことこのグランデル村に関しては、遠方へ行く場合の中継地としても立ち寄ることが多い。俺がここを訪れるのはこれで五回目であり、おかげでこの村の宿屋のおじさんとはすでに顔見知りになっているのである。どれくらいの新密度かというと、

「おや、ダル君か。いらつしゃい」

と、（発音しにくいのか知らないが）名前をはしよって呼ばれるくらいだ。……まあ、それくらいは別に気にしないが。

俺はカウンターの方に歩を進めながら、

「どうも、ご無沙汰してます」

「一泊かい？ まあとりあえず、ここに記帳してくれ」

この宿屋の主人たる白ヒゲのふくよかな体型のおじさんは、いつも通りのにこやかな対応をしつつ、カウンター越しに台帳を差し出してきた。なので、俺は備え付けのペンを手にとって、そこにいつも通りの必要事項をつらつらと記入していく。

「ウチを利用してくれるのもこれで五回目だっけね？ もうダル君も常連さんだなあ。ようし、特別に料金一割引きにしてやろう」

「え？ そんな、悪いですよ」

「いやいや、遠慮しないでくれ。新米の賞金稼ぎつてのは、懐が寂しいんだろう？」

……よく知ってるなあ。俺がこの宿をひいきにしているのも、サービスがまともで比較的料金が低いからなのである。完全に見透かされてるな。

「凶星か？ かつかつか。まあ、気にするな。私の勝手な好意だ。

実は私の息子も君くらいだね。頑張ってる少年を見ると、つい情が湧いてきちゃうんだ」

「息子さんがいらっしゃるんですか？」

「ああ、出て行ってしまったんだがね」

白ヒゲをなでながら、おじさんは苦笑。

「有名な賞金稼ぎさんに弟子入りするって言ってね。一端の賞金稼ぎになるまでは帰らないとまで豪語して、出て行ってしまったよ。

五、六年くらい前のことだがね。……果たして今はどうしてるやら」

「そ、そうなんですか……」

「ま、いつかあいつがひょっこり帰ってくるんじゃないかと待ってるわけで、逆に人生の楽しみが一つ増えたとも言えるんだがね。かつかつか」

お腹を揺らして笑うおじさん。

何とも前向きな捕らえ方だ。同じ失踪にしても、ルーの場合とは大違い。……まあ、状況が全然違うち、単純に比べるのも不躰だとは思うが。

「で、どうする？ もう部屋に入るかい？」

「いえ、ちよつとこれから用事があるので、予約だけしておいて、ちよつと出かけてきます」

「そうかい。んじゃまあ、大きい荷物だけ預かっところ」

「お願いします」

そう言つて、俺とギーンは背負つていた荷物をカウンターに預け、宿屋を後にした。

今回の仕事において、俺達は相手方について何も知らされていない。

これも荷物運びの仕事にはよくあることで、余計な情報を知つてしまつと、そのせいで命を狙われてしまうこともある。危険が増してしまうのだ。だから俺達は特に不審に思うことなく、この条件でこの仕事を請負つたのである。

ただ、何も知らないと相手と落ち合うこともままならないので、当然のごとく時間と集合場所だけは決められている。そして時間通りにその場所にたどり着いているかどうかが本仕事の信頼性に関わるものなので、俺達は余裕を持って村を出て、

グランデル山に向かった。

日没まであと数時間はあるだろうという時刻。

ふもとの村を眼下に見下ろせる崖の間に、ぽつんと立っている木。ここが『指定された場所』である。

約束の時間まであと十五分ほどあり、もしかしたら相手方はまだ来てないかも知れないと思いつつそこに到つたわけだが、俺とギーンがそこに赴くと、すでに二つの影があつた。

このグランデル山は何の趣もないハゲ山で、ここに散歩やハイキングや登山を訪れる人なんてまずいない。この山中で他人に会うこ

とすら珍しいことで、間違いなくこの二人こそが今回の取引相手だろう。

俺の隣を歩いていたギーンも同じ結論に達したようで、

「どうも、お早いですね」

と、二人の方にすたすたと近づいていく。

そのギーンの後方、一体全体こんな危険そうなミッションを遂行しているのはどんな人物なんだと思いながら、俺も二人の方へ近づいていって

そして俺は驚いた。

片方は青白い髪のある種豪快そうな笑顔を浮かべた、四十、五十くらいのおじさんで、それはどうでもよかったのだが、もう一人それは俺が誰よりも見知っていて、誰よりも共に時間を過ごしていた、長身で細身で眼鏡をかけた青年

我が従兄弟、ラキだった。

「……え？ ……ラ……ラキ……？」

と、それだけを喉から搾り出すのが限界だった俺の反応に、ラキは五年以上毎日のように俺に向けていた穏やかな笑顔で、

「ふふ。お久しぶりです、ダルク」

数ヶ月前と何ら変わらない声で、そう言ってくる。

その俺のリアクションにきょとんとしたギーンが、

「……？ お知り合いですか？」

「ああ。 …… …… というか、従兄弟だ。この前まで一緒に住んでいたんだが……」

「え？ そうなんですか？ …… はあ、確かに似てますね。まるで十年後のダルクさんを見てるようです」

驚いた顔で、まじまじとラキを観察するギーン。

ラキはそこにやかな顔をギーンに向けて、

「ふふ。初めまして。ダルクの従兄弟のラキと言います。よろしく。

……あなたがギーンさんですね？ ふふ。ダルクから聞いてますよ。その歳でアステルギルド随一の頭脳派なんだとか」

「そ、そんな、滅相ありません」

ギーンは照れ笑いしながら、

「というか、『カザミドリ』の情報収集をなさってるんですよね？ ラキさんも賞金稼ぎなんですか？」

「いえ。数年前にちよこつとやっていたこともあったんですが、今は休業してるんですよ。ただ、腕には少々覚えがあるので、護衛のようなことをやってるんです」

……ぼやかすような言い方をするラキ。そりやそうだろう。自分が世界に名を馳せる殺し屋『闇蛇』だなんて、そう簡単に名乗れるわけもない。

ラキは話題を変えるように、

「……それよりもまず、こちらの方を紹介しましょう、こちらは

」

「はっはー、いやいや、初めまして」

今さっきまで後ろで傍観していた青白頭のおじさんが、壮大な笑顔でずいっと前へ出てきた。

「どうもどうも、君がダルク君か。ラキ君から話は聞いてたよ。自慢の弟だそうで」

そんなお世辞を並べながら、そのおじさんは俺に右手を差し出してきた。つられるように俺も手を差し出し、ギュツと握手をする。

……痛い。力入れすぎだ、この人。

「それに、ダルク君、君にはウチの娘も世話になってるようだねえ。いやいや、その歳にしてずいぶん落ち着いた少年だ。実直そうだねえ。将来が期待できそうだよ。ふーむ………君みたいな子がウチの娘を貰ってくれば、私も安心なんだがねえ？」

………どうということだ？ 娘？ 世話になってる？ 俺に？ ……

………って、ま、まさか、この白髪交じりの青い髪、もしかして、もしかしてもしかして

「私はコルーツ博士。ルーの父親だよ」

「る、ルーのお父さんっ？」

思わず素つとん狂な声が出てしまった。

「……もとい、あなたがコルーツ博士なんですか？」
「いかにも」

コルーツ博士は陽気な笑顔で大きく頷いた。

コルーツ博士。

五年ほど前、『銀石』の作成に成功したアステル国研究所の元所長。しかしその研究成果によりカザミドリに狙われることになり、家族の前から姿を消した人物だ。

そしてルーの父親でもある。

元タルーが賞金稼ぎを始めたのも、情報の流れが大きい場所に身を置き、さらに人探しのスキルを上げて、いつかこの父親を見つけ出すためだったのだ。

この父親との再会が、ルーの悲願なのだが

「……というか、あなたがカザミドリの情報収集を行っていたんですか？」

「ああ。身を隠すついでに、逆に敵について色々調べてたんだ。このラク君に護衛してもらいながらね」

……そうだったのか。

確か、この前のリンクさんの説明には「『銀石』の研究は七割がた終わっている」っていうのがあったが　　そうか、そうだな。どこまでできれば研究の七十パーセントが終わってることになるのか　なんてことは、専門外の人間にわかるわけもない。というか、百パーセントを知っている人間じゃなきゃ、七十パーセントを目算できるとも思えない。それが分かるのは、この世界で唯一『銀石』を作ったことがある人　　コルーツ博士。この人にしか扱えない情報だったんだ。

俺は納得しつつ、博士の外見を眺め、

「……無事だったんですか？」

「ああ。表立って行動できないのは相変わらずだがね」

「……無事なら無事と、ルーに伝えてあげることはできなかったんですか？ ルーは、今までずっとあなたを探すために一生懸命だったんですよ？」

「ああ、そうだね。娘には悪いと思ってる。……ただ、『失踪』そして『生死不明』としておいてもらった方がよかったのさ。家族を人質にとられる心配があったしね」

「……でも」

「それに、コンタクトを取る術がなかったんだ。あの娘の周りにもマークがついてたりしてね。だから、いい機会だから、君からあの娘にそれとなく伝えておいてくれないか？ 『父さんは無事だ。すべてが解決したら会おう』ってね」

「……はあ、分かりました」

結局まだ再会するわけにはいかないのは何ともじれったいが、生きてることがわかっただけでもルーには朗報だろう。これであいつも、少しは落ち着くだろうか。

と、コルット博士はギーンの方を振り向き、

「……まあ余談はこれくらいにして、早速仕事の方に移ろうか」

「あ、はい。ええと……これです」

ギーンはカバンからギルドで渡された封筒を取り出し、コルット博士に差し出した。

博士はそれを受け取り、

「ありがとう。助かるよ。ここには援助資金も入っててね、これがないと食事ができなくなるんだ。で、こっちから渡すのは、この手紙だ。リンクさんに渡してくれ。よろしく頼むよ」

そう言って、今度はコルット博士がギーンに封筒を渡す。メモ帳ぐらいの、やや小さいものだ。

それをカバンにしまっギーンを横目で見つっ、この中にはどんな

情報が書かれてるのかと思っていると、コルット博士が俺の疑問を汲み取ったように、

「そこに書いてあるのは、カザミドリの最近の動向だ。……まあ、君らもそのうちギルド本部の人間から聞くことになると思うから暴露しちゃうとね、奴らの『銀石』の研究は終わったらしい」

「……終わった？」

「つまり、完成したってことだ」

「……………」

「あいつら、最近になって『白石』と『黒石』を回収し始めてね、その研究スピードが飛躍的に上昇してたんだ。いつ完成するのか冷や冷やしてたんだけど、一昨日カザミドリの研究施設に潜入したところ　　というか、ラキ君に潜入してもらったところ　　研究は終わってた。完成してたんだ」

「……じゃあ、あいつらは、その『複数の国を相手に戦争ができるくらいの戦力』ってのを手に入れたってことですか？」

「そう、そういうこと。……本当、まいったよ。私が関わらなければもう少し時間がかかると思ってたんだがなあ……………」

頬をぽりぽりかきながら、ため息をつくコルット博士。

「……というか、博士。一つお尋ねしたいんですが」

不意に、ギーンが質問を投げかけてきた。

「その『銀石』の性能っていうのは、一体何なんです？　一度開発したことがある博士なら、ご存知なんでしょう？」

「まあね。……ただ、これを教えちゃうと、他の人間までこれが欲しくなるかもしれないから、あんまりおおやけにしたくないんだけど……………」

腕を組んで思い悩むような前置きをした後、コルット博士は、

「　まあ、それを知らないと逆に君らが危険になるから、情報として与えといった方がいいかな。……ええと、知ってるかどうかかわらないけど、『銀石』っていうのは、『黒石』と『白石』を混ぜ合わせて作るもんなんだ。まあ、両方とも扱いづらい『石』だからね。」

混ぜ合わせるために色んなデータとノウハウが必要なんだけど」

「へえ……」

ギーンは感嘆を漏らす。

それを以前に あいつ から聞かされていた俺は、別段驚きはしないが。

「それはつまり、無限のエネルギーと無限の無を混ぜ合わせるということ。ようは、プラス無限大とマイナス無限大を足し合わせるようなものだ。計算不能。黒と白の接合部で、計り知れないエネルギーが一瞬で生まれ、一瞬で消える。これによってね

空間が歪むんだ」

「……空間が？」

「そう。そしてこの『銀石』が発動すれば、その周囲の空間にあるものすべてが 形や質量や強度によらず、あらゆるすべてのものが破壊され、消え去る。シールドを張っても、その壁ごと消されちゃうわけだからね。文字通り空間が壊される。巨大な城も爆弾一個で消滅させることができる。防ぎようがない。無敵の攻撃になるわけだ」

「……む……無敵」

ギーンは声にならない声で、

「……だ、だからカザミドリは躍起になってそれを開発し、国はそれを阻止しようとしてるんですね」

「そう。そういうこと」

ゆっくりと頷くコルット博士。

……そりゃ、確かに危険だ。あんな危ない集団にそんなものを使わせたらどうなるか、分かったもんじゃない というか、

ここで一つ、俺の中に疑問が生まれた。

「……あ、あの、博士」

「ん？ なんだい？」

というか、ダルク君。『博士』なん

て呼ばずに、さっきみたく『お義父さん』って呼んでくれて構わないんだよ？ 我が息子よ」

「『お義父さん』なんて言ってますん！ 『ルーのお父さん』です！ ……というか、『銀石』の開発が終わったなら、あいつらはもう博士には用はないはずじゃないんですか？ なら、もう自由に動けるんじゃないんですか？」

「はっは、それがさあ、さらに面倒くさいことになっちゃってね」

コルット博士は、相変わらずの豪快な笑顔に困ったような雰囲気を見せて、

「実はその『銀石』ってのがさ、その構成からしてすごく不安定なものなんだ。十度くらい温度を上げただけですぐ発動してしまうくらいにね。だから、普通の銃や砲台で『銀石』を飛ばすことができないんだ。発射させた瞬間、砲台の熱で『石』が発動してしまう」

「……じゃあ、『銀石』は遠距離攻撃には使えないってことですよね？ なら安心していいんじゃない？」

「それが、そうでもないんだ。熱を生まずに弾を発射できるシステムがあるんだ」

「何です？」

「ルーの側にいた君なら知ってるんじゃないか？ それは

『青石』の銃、『サイキ』だよ」

「あ……………」

思わず声が漏れる。

コルット博士は、だらしなく口を半開きにしてしまった俺をにやりと見やり、

「そう。私がルーに渡した銃『サイキ』は、『青石』の性質を利用して、わずかな温度上昇だけで弾を発射することができるようにしている。『銀石』は『白石』の影響を『黒石』で相殺しているからね。発射する瞬間には熱をほとんど生まないんだ。だから逆に『サ

イキ』が熱で壊れることもない。あの銃ならば、その不安定な『銀石』を問題なく飛ばすことができるんだよ」

「……ってことはつまり、今狙われてるのは」

「そう。『サイキ』および、私の頭の中にあるそのシステムの設計図だ。そのせいで、最近ルーの周りのマークも厳しくなってるんだよ。あの娘と一緒に行動してて、誰かの視線に気付いたことはなかったかい？」

誰かの視線？ …………… あった。

以前、赤雷鳥のタマゴを取りにコロノ山に行った時、馬車停留所の側で変な視線を感じたことがあった。あれはてつきりウエリイのものだと思っていたが…………… そうか、違ったのか。もしかしたら、イヴが言ってた「最近君らの株が上がってきてる」というのも、そういうことだったのかもしれない。

「はっは。まあそういうわけで、私はまだルーに会うわけにはいかないし、私自身もまた姿を消さなければならぬわけだ。…………… まったく、科学者つてのは難儀な職業だよなあ。まあ、好きでなったんだけどさ」

と、ここでコルット博士は腕時計を眺め、

「じゃあ、貰うものは貰ったし、渡すものは渡したし、とりあえずこの辺りで別れようか。あんまり一つの場所にいるのも危険だしね。じゃあ、ラキ君」

「そうですね。行きましょうか、博士 と、その前に一つだけ」

そう言って、ラキがおもむろに俺の近くに寄ってきた。

そして吐息が頬にかかるくらいに俺の耳に顔を近づけてきて、博士にもギーンにも聞こえないくらいの小声で、

「………… ふふ。段々雰囲気が出てきましたね、ダルク。そろそろ社会勉強も終わりにして、『本職』の仕事を始めてもいい頃合ですよ。

二つ名 も貰ったことですしね。私が太鼓判を押します。ふふ。

あなたと肩を並べて、私達の『生業』に赴ける日を楽しみにしてま
すよ」

そう言っと、ラキは俺の耳元から顔を離した。

俺は頭を真つ白にしながら、その言葉だけを記憶に留める。

ラキは相変わらずの人当たりのいい微笑のままで俺に手を振り、コルルト博士と共に山道を下りようと歩き出した。その瞬間だった。

[illegible]

目の端に白い閃光が走り、同時に唸り声のような、耳に痛いほどの低音が鳴り響いた。

風が荒ぶ。

地面が揺れる。

何事かと思つて周囲を見渡し、そして崖の下に視線を向けて、ようやくその光と音と振動の発生源が分かった。

数メートル下、つい三秒前までそこにあったはずの村が

黒いサラ地と化していた。

第九話

……何も無い。

何も、ない。何も、ない。何も、ない。何も、ない。

ここには、何も、ない　　いや、無くなった。何もかもが無くなった。

消えてしまった。

刹那で、消えてしまった。

あつけなく、消えてしまった。

家も、店も、宿も、門も、道も、柵も、塀も、井戸も、食べ物も、飲み物も、日用品も、美術品も、本も、草も、木も、花も
そして人も。

つい数分前まではあつたのに。あつたはずなのに。

ここには民家があつたはずなのに。そこで家族が暮らしてたはずなのに。

ここには店舗があつたはずなのに。そこで買い物客が談笑してたはずなのに。

ここには宿屋があつたはずなのに。そこで休んでいる旅人がいたはずなのに。

ここには食堂があつたはずなのに。そこで料理に舌鼓を打っている人がいたはずなのに。

ここには酒場があつたはずなのに。そこで宴会を開いている人がいたはずなのに。

ここには花屋があつたはずなのに。そこで花を愛でている人がいたはずなのに。

……そう言えば、さっきの宿屋のおじさんはどうした？　どうなった？　あの白ヒゲの笑顔はどこへ行った？　せつかく顔見知りになったのに。せつかく名前を覚えてもらえたのに。せつかく常連になったのに。せつかく一割引してくれたのに。あのおじさんはずっ

と……息子の帰りを楽しみに待ってたのに。

宿屋の前の道でよくサッカーをしてた坊主頭の男の子はどうした？　どうなった？　あの無邪気な笑顔はどこへ行った？　見かけるたびに「お兄ちゃんも一緒にやろうよ」と笑いかけてきてくれたのに。

この村に来るたびにいつも通ってたレストランで「うちのお勧めは魚料理だ。食ってみなよ。驚くほどうまいからな」と言ってくれた料理長はどうした？　どうなった？　あの自信満々な笑顔はどこへ行った？

よく道を聞きに行っていた駐屯所で「グランデル山にやあ水汲み場が一つもないからな、飲み水は多めに持ってた方がいいぞ」と教えてくれた自警団の人はどうした？　どうなった？　あの気遣うような笑顔はどこへ行った？

どこへ行った？　どこへ往った？　どこへ逝った？

消えた、のか？

馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な　　そんな馬鹿な。

さっきまでここにあったのに。　あつたはずなのに。

けれど

それはもはや夢か幻だったとしか思えないほどに　　ここに
は何もない。

何も、ない。何も、ない。何も、ない。何も、ない。

まるで雨の降らない荒野のように、えぐれて焦げた土しか、ここにはない。

「これほどとは……」

俺の横、呆然としたギーンが、自分に語りかけているように声を出した。

「まさか、『銀石』の破壊力がこれほどだったなんて……。半径数十キロを、すべて無に帰してしまうなんて……」

「……ってか、こういうことなんだ、これは？」

俺はギーンに問いかける。

「どうやったらこんなことができるんだ？ 『銀石』は発射できないはずなんじゃないのか？」

「恐らくとしか言いようがありませんが」

ギーンはなおも黒い地面を見下ろしながら、

「ここに『銀石』を運び込んで、この場所で人為的に発動させたのでしょうか？」

「何だ？ この村に『銀石』を設置して、遠方からそれを射撃したってたってのか？ それとも誰かが発動させるのを待ってたとか？」

「……いえ。『銀石』はあくまで貴重なものですし、ギルドに『カザミドリ殲滅作戦』が届いて以降はどこも結構厳重に警戒されてましたからね。『銀石』を放置するなんてリスクなこととはしないでしょう」

「……じゃあ、どうやって」

「恐らく、ですが」

ギーンは言いづらそうに声を溜めたあと、

「自爆です」

「じ、自爆っ？」

俺は驚愕しつつ、

「何でまた、そんなことをしたんだっ？」

「十中八九、この『銀石』の恐ろしさを知らしめるため、そしてカザミドリの脅威を知らしめるためでしょう。この所業に恐れをなした国に対して、有利に交渉できると目論んでいるのかもしれない」

「そんな……ことのために」

奴らは村を一つ消したのか？ 何百人の人間を消したのか？

そんな、そんなことのために……。

俺の脳裏に、リンクさんの言葉がフラッシュバックする。

『複数の国を相手にして戦争を起こせるだけの戦力』

あの時は、このセリフを セリフ としてしか理解してなかった。認識してなかった。いまいち想像できていなかった。イメージできていなかった。

しかし……そうだ。そうなんだ。

国に対抗できる戦力。戦争を引き起こせる戦力。国を潰すことができるだけの戦力。国民を皆殺しにすることができる戦力。つまりは、そういうことなんだ。

村一つを 数百人の人間を一瞬で消せる。

俺の親類だろうが、友人だろうが、知り合いだろうが、敵だろうが、他人だろうが、わけなく、難なく、関係なく、すべてを消し去る。消し去ることができる。

それは、そういう 力 のことだったんだ。

リンクさんは、そういう 力 のことを言ってたんだ。

俺は理解した。ようやく理解した。目の当たりにして、理解した。理解しても、すでに手遅れだが。

……いや。あの時俺がちゃんと認識していたところで、何も変わらなかっただろう。どうにもならなかっただろう。俺一人にはどうしようもなかっただろう。なす術がなかっただろう。

それだけの戦力 殺戮能力なんだ。

ふと、

「……あるいは」

ギーンが顔を上げ、俺の方を見てきた。

「ここにカザミドリの敵になる人間がいて、その人を消すために講じた策である可能性も否定できません」

カザミドリの敵？ ……って、まさか

「クルート博士！」

「……いえ、それは違うでしょう」

ふるふると首を横に振り、ギーンは否定してきた。

「あいつらの目的は、クルート博士に『サイキ』のシステムを聞き

出すこと。消してしまつては意味がありません。彼らの標的は別でしょうね。……とはいえ、これだけのことをしたんです。この結果を確認するためにカザミドリの人間がこの近くに来ている可能性もあります。博士とラキさんがあの後すばやく身を隠したのは正解だつたでしょう」

そう。

この爆発があつた直後、ラキは俺に目配せをして一つ頷くと、博士を抱えて山の奥の方へ身を隠してしまつたのだ。どうして山の上へと登つていったのか少々疑問だつたが……そうか。ラキはあの瞬間でそこまで考えが至つていて、そういう選択をしたわけか。呆れるほど思考が早い。

しかし

「あいつら、こんなことをする道具と意思があるってことは、世界中どの町も、今にも消される可能性があるってことじゃないか……くそつ、ヤバいじゃないかよ」

もはや誰の形見も遺骨も、思い出すら拾えないような黒い大地を、俺は再度見回した。

ここには、もう何も無い。

何も、ない。何も、ない。何も、ない。何も、ない。

ここには、もう絶望しかない。

どうしたって、どうやったって、笑い話には転ばない。どう転んでも、笑えない。笑えやしない　　絶望するしかない。後ろ向きにしか、ならない。

……こんな光景を見て、それでもあの厚顔無恥男ロツトなら、前を向くことができるのだろうか？　考えなくせにいつもギリギリでピンチをかわしていくあの男なら、どうにかできただろうか？　あの男がここにいれば、どうにかなつたのだろうか？　「はっはっは」という高笑いと共に、解決できたのだろうか？

……俺は、こんな状況なのに　　あるいは、こんな状況だからこ

そ
あの底抜けた笑顔が、やたら懐かしかった。

第十話

グランデル村からアステルに帰ってきて、俺がまず最初にしたことは、ルーへの報告だった。

ギルドへの手紙運びおよび報告はギーンに任せておいて、俺は直接ルーの家へ向かった。これがロットだったら「面倒くさい雑用をひとに任せるな!」とぶつくさ言ってきたきそうなものだが、ギーンがそんな反応をするわけもなく、「ルーさんに早く伝えてあげてください」と快く承諾してくれた。何で俺は今までこいつと組まなかったんだろ……と後悔するほどの人の好きである。

俺が家を尋ねると、ルーは開口一番「ギルド、辞める気になってくれた?」という質問をぶつけてきたが、俺はそれをやんわりとかわしつつ、「それよりもさ、すごい朗報だ」という前置きと共に、コルト博士が生きていること、そしてすべてが片付いたらまた会おうと言っていたことを伝えてやった。

それを聞かせた瞬間、ルーはぺたりと膝から崩れ落ち、一体どうしたのかと俺は慌てたのだが、その後笑顔で泣きじゃくり始めたのを見て、俺は安堵した。

ルーは泣き笑いながら一緒に聞いていた母親、祖父と抱き合い喜びを分かち合っており、この感動の場面を他人が邪魔するのも忍びないということで、俺は静かにルーの家を後にした。

そして一応、俺もギルドへと向かった。

カランカランとベルを鳴らしながら中に入ると、諸々の手続きがちょうど終わったところらしく、ギーンも帰り支度を始めていたところだった。

俺は、リュックを「よっこいせ」と背負っているギーンの方へ寄っていき、

「もう終わったのか?」

「はい、一通り。グランデル村についての報告も済ませました」

「そうか。悪かったな、任せちゃって」

「いえいえ」

ギーンは笑顔で横に手を振り、

「……それより、ちようどよかったです。夕飯一緒にしませんか？
誘われたんですよ」

「誘われた？ って、誰に？」

と、俺がギーンに尋ねたところで、俺達の方に割って入ってきた人物。

そろそろ夜風が涼くなる時期だというのに、いまだTシャツに
ハーフパンツ、サンダルといういでたちで、茶髪にバンダナを巻い
た、二十台後半くらいのお兄さん アンディさんだった。

アンディさんは、俺とギーンの肩にぼんと手をのせ、

「おう。ちよっと、付き合ってくれ」

「そうか。コルット博士は生きてたか……」

アステル城下町の外れ、今まで俺はその存在も知らなかった食事
どころの個室で、俺とギーンを目の前に据えたアンディさんに、俺
は今回のグランド遠征の顛末を伝えた。

俺は食べ終わったビーフシチューの皿をテーブルの脇に寄せなが
ら、

「アンディさんは知らなかったんですか、そのこと？ ラキから聞
いたりしてなかったんですか？」

「ああ、あいつとはここ数ヶ月連絡を取ってなかったからな。あい
つが今どんな仕事してんのか知らなかったんだが なるほど、

コルット博士の護衛ねえ」

アンディさんは腕を組み、納得するように一つ頷いて、

「しかし、これですっきりしたぜ」

「すつきり？ 何がです？」

「何でここ最近、アステルで隠密っぽいやつを見かけることが多かったのかってことだ」

「隠密っ？ この町にもいたんですかつ？」

「ああ、まあ監視するだけみたいで、殺気はなかったんだがな。ただあんまり鼻につくんで、知り合いにそいつらのマークをさせてたんだが。……早めに手を売っておいて正解だったな。いつの間にか『サイキ』をぶん盗られて奴らの戦力をアップさせてたんじゃ、目も当てられねえし」

「そ、そうだったんですか……」

「……いや、本当に危なかった。『銀石』が完成したのが二日前。その直後からカザミドリが『サイキ』の奪取に本格的に乗り出していたとしたら、本当に間一髪だった。アンディさんの判断の早さに感謝するばかりである。」

俺は心うちで身震いしながら、

「……あ、ありがとうございます」

「くはは、いやなに」

アンディさんは、いつもながらの気持ちいい笑顔で高笑い。

「あいつらにこれ以上戦力を与えちゃあ、本格的にやばいからな。」

…… グランデル村のあの惨状、お前らも見たんדר？」

「ええ……… 特等席で見ましたよ」

隣のギーンが、ほとんど笑っていないような苦笑いで頷いた。

「もし数十分のタイムラグがあつたら、僕とダルクさんまで巻き込まれてました」

「……… そうか」

アンディさんは、テーブルの上のリキュールを一口ぐくりと飲みながら、

「そりゃあ、危なかったな。とりあえずお前らが無事で何よりだ」

「ええ……。しかし、あんなことになるなんて……」

テーブルの木目を見つめながら、ギーンはため息のように呟く。

と、グラスをテーブルに戻したアンディさんが、

「……………六件」

「へ？」

「昨日、同じようなことが他に、全世界で六件起こってる。『トロネオ』、『ツバラ』、『シェーン』、『アラスタス』、『リリ』、『フウト』の六つだ。これら六つの町や村とグラन्दェル村が、奴らによって消されちゃった。その被害者は　　概算で十万人に及ぶ」

「じゅ、十万……………」

俺とギーンは、同時に声を漏らした。

アンディさんは静かに頷き、

「ああ。それだけの被害が出る。しかも、どこもかしこも中規模な人里が選ばれてやがる。……………まったく、狡い奴らだ」

「城や大規模な城下町は狙われてないんですか？」

「ああ。……………まあ、そんな怪しい人間が、警備が厳重な城の中や城下町にそうそう入れるわけもないからな。アステルも当分は安全だろう。……………ただ、奴らに多くの人間の命が握られてることには変わらない」

「……………命を……………握られる」

「そう。あいつらのさじ加減一つで何万人もの人間が消えちゃうんだ。……………ちっ！　俺達も色々注意はしていたんだが、いよいよ後手に回っちゃった」

忌々しそうな顔で、虚空を見つめるアンディさん。

ギーンは、オレンジジュースを一口こくりと飲み、

「……………しかし、こうなるといよいよ各国の軍が動くことになりそうですね。戦争　　なんて大規模な抗争にならなければいいんですが」

「いや、国は動かねえよ

　　とうより、動けねえ」

「え？」

ギーンは顔を上げ、きょとんとして、

「国が動かない？　どういうことです？」

「……向こうに『銀石』があるってことは、ようは人質をとられてるようなもんだ。大々的に動いて、それが向こうにばれたら、その国の町や村が消されかねえ。人民を守るのが国の役割だからなあ。……いや、強情な軍事国ですら、経済の混乱が起きるのを恐れて、そう簡単には手は出せねえはずだ。できて隠密行動くらいだろう」

「軍事国ですら、ですか……」

「ああ。こういう事態を回避するために、それぞれ色々動いてたはずなんだがなあ。後手後手になっちまつてる。……やっぱ大きい組織ってのは、どうしても動きが遅くなるもんだ」

「じゃ、じゃあ、どうするんです？」

疑問　というより、むしろ追及するような口調で、ギーンは

「国が動けないんじゃ、誰がカザミドリを止めるっていうんですか？　このままじゃ、あいつらが野放しに」

「だから俺達がいるんじゃねえか」

アンディさんは、シニカルな微笑をギーンに向けてきた。

「俺達ギルドの人間なら　何も背負わず、各々が個人でしかない俺達なら　あいつらを真っ向から敵に回せる。あいつらと戦えるのは、俺達賞金稼ぎしかない」

「……でも、どうやって？　攻撃しようにも、あいつらの動向が掴みきれてないんでしょう？」

「それが、おかげさんでな」

ギーンの疑問に、アンディさんはモノを含んだような笑みで、
「最近、奴らに関する情報が飛躍的に集まるようになったんだ」

「……コルト博士からですか？」

「いや、別口の、もっと信頼できるところだ。で、昨日ま

で、必要な情報はすべて揃った。というか、揃えた」

「……全部？」

「ああ」

アンディさんは大きく頷き

「あいつらの拠点は、すべて押さえた。もちろんカザミドリ本隊の居場所も」

「本当ですか！」

イスを揺らし、中腰になるギーン。

「ああ。おかげさんでな。ちゅうわけで、カザミドリ本隊の殲滅作戦を組むことになった　　というか、組んでる。メンバーもすでに決まってる」

「そ、そうだったんですか……」

「ああ。それで、俺も本隊拠点の潜入組みになっててな。ギルドの総力を挙げて直々に戦いに行くことになった　　そこでだ」

アンディさんは、急に俺達を真つ直ぐ見据えてきて、

「本隊殲滅作戦に召集されたメンバーは、各々補充人員を連れてくることになってるんだが　　俺はお前達を連れて行こうと考えている」

「お、俺達ですかっ？」

俺は思わず聞き返した。

「いや、いくらなんでもそりゃ無理があるでしょう。いや、諜報員としてギーンは分かりますが……でも俺は、足手まといにしかありませんよ。アステルギルドには、もつと他にも腕に覚えがある人間がいるでしょう？　これは危険な作戦だったのは、俺だって理解してます。大体そんな独断、他の人の猛反発に会うのは目に見えてるじゃないですか」

「そうでもないぜ」

アンディさんは頬を引きつらせた笑みを浮かべ、

「リンクさんも同意してくれた。他の連中も、ダルク、お前が少々まともじゃない　ってことには、薄々感づいてるぜ。……まあ、十三番隊殲滅作戦の時に俺がお前を重宝しちまったせいで、その疑

惑が濃くなっちまったみたいだな。とりあえず、反対する奴は誰もいねえ。問題はない」

その婉曲的な言い回しに、隣のギーンがいぶかしんだ顔で俺を見ている。

しかしアンディさんは、そんなギーン表情を意に介することなく、

「とにかく、俺はこの作戦に命を懸けてる。そして成功させるために、お前らの協力が必要だと思ってる。だから、付いてきてくれねえか？」

懇願というよりもむしろ諭すように言ってくるアンディさんに、

俺は

「……何でアンディさんは、カザミドリに関して、そんなに積極的なんですか？」

静かに問いかけた。

「十三番隊壊滅作戦の時だって、アンディさん、何やら暗躍してたんですよね？ やけに深く絡んでるような。……何かあったんですか？」

「……まあ、な」

アンディさんは言いにくそうに、口元を歪めながら、

「……実はよ、俺は今まで、三人ほど使いつぱしりを置いてたんだ」「使いつぱしり？」

「ああ。弟子……みたいなもんさ。そこまで本格的なもんじゃなかったがな。ギルドにおけるイロハ、状況判断におけるノウハウ、そして戦い方を詰め込んでやったんだ。俺も、あと数年したら第一線を退くことになる。その前に、次の世代の人間を育てておこうと思っただけだ」

「はあ、それは意外でしたが……しかし、それがカザミドリとどんな関係が？」

「ああ。実はな」

その三人が三人とも、カザミドリに行っちゃったんだよ」

「……………」

「いよいよそいつらの頭角が現れてきた、いよいよギルドの第一線に躍り出るって時に、カザミドリに引き抜かれていつちまった。：

…まあ、俺はこの通り大雑把な性格だからな。あいつらの人間性までは把握できなかった。コントロールできなかった。ただ、競争相手を凌駕する、虐げる、退ける術とその快感を教えただけで、それだけで終わっちゃった。言いにくいが

イヴァリーも、そのうちの一人だ」

「な……………」

反射的に声が漏れる。

…… イヴが、アンディさんの教え子？ そ、そんな

いや、思い当たる節はある。あいつは服装がどことなくアンディさんに似てたし、その口調や性格も……。第一印象の際、俺はあいつをアンディさんとダブらせてしまったのも、否定しようのない事実だ。

あいつはアンディさんを師とした人間、だったのか……。

「…… だから俺は、カザミドリに戦力を与えちまったみたいなものだ。あいつらに殺された人間のうち数パーセントは、俺の責任でもある。だから俺はあいつらを止めなきゃなんねえ。止める義務がある。なんとしても止めたい。だから」

アンディさんは俺達の前で、深く、深く、深く、その頭を落として、

「頼む。俺に力を貸してくれ」

第十一話

俺は、レストランの入り口でアンディさんとギーンと別れた。

そして街頭がぼつぼつ立っているだけで周りに誰もいない夜道、イヌの遠吠えしか聞こえない静寂の中を一人でトボトボと歩きながら、延々と考えを巡らしている。

さっきの食卓での会話では、俺はアンディさんに対して、分かりましたそれならそれで問題ないです、とでも言うように、さも余裕そうに取り繕っていた。しかし、内心ではいくらか動揺していた。動揺し続けていた。そして現在もその憂慮は続いている。即ち

俺が まともじゃない ことに周囲が気付き始めている、これについて。

……いや別に、ただのナイフ使いの十六歳の少年のままでギルドの仕事をもつとうでできるなんて、そんなこと、ハナから思っていないかった。期待してはいなかった。俺だってそこまで浅はかじゃない。

実力を発揮すればするほど、ラキから教え込まれた技能が顔を出すことは目に見えている。

だから、疑われる程度はしょうがないと思っていた。諦めていた。それくらいならリカバリは効く。隠しようがある。後々にも問題はないはずだ。これくらいは予定の範疇内。今さら慌てたりはしない。

しかし、これ以上確信を持たれるのはヤバイ。

核心に近づかれるのは、ヤバイ。

俺は今、顔を隠さずに動いてるんだ。アサシンとして顔が割れてしまつては、素顔ではおいそれと行動できなくなってしまう。行動範囲が極端に制限されてしまう。例えば数年前に巷を賑わせた盗賊

であり、ロットのターゲットでもあるヒューミットなる賞金首は、手配書が全国に出回り、もはやどこぞの国王以上に顔が知れ渡っている。そのせいで、検問がある城下町には一切入れなくなったと聞く。そんな状態じゃ、盗賊稼業とは言え、普通の手段じゃほとんど生活できないだろう。生きていくのもままならなくなる。

もちろん俺にはそこまで驚異的な業績を残す自信は欠片もないが、しかし似たような状況になってしまふことは否めない。想像に難くない。そんなことになれば、俺の『生業』にも影響が出てしまう。そうなる前に手を打たなければならぬ。

つまり、そろそろだということだろうか？

そういう時期だということなのだろうか？

ラキは、「いい頃」だと言っていた。太鼓判を押すとも言った。つまり、今俺がそちらに行っただとしても、少なくとも 向こう側からは問題ないということだろう。最低限の資格はあるということだろう。従兄弟であり、先輩であり、教育者でもあるラキから、俺はようやく認められたんだ。

それに、ルーも「ギルドやめよう？」と言っていた。ギルドの仕事が危険なことを実感したんだろうし、それに父親の消息が分かった以上、あいつがこれ以上ギルド仕事を続ける意味もないのかもしれない。ルーが辞めるならば、実質俺達のチームは解散。俺をギルドに繋ぎとめるものは何もなくなくなる。もちろん、ルーが辞めようと言ってきた理由はそこじゃないのは分かっているが……。

元々俺がいつかギルドを辞めなければならなくなることは、分かっていたことだ。割り切っていたことだ。今更躊躇する理由はない。必要はない。

この『カザミドリ本部壊滅作戦』が、引き際としてちょうどいいのかもしれない。

数分間に渡る内部葛藤の末、俺はついにそんな結論に達した

達したところで、ふと視線を上げると

目の前の街頭の下に、人影が映っていた。

それは白髪ショートヘア。俺より少しばかり低い身長で、ダボダボのパーカーを着た少女　　ワイトだった。

まるで幽霊のように、暗闇の中に白い髪と肌が浮かんでいる。信心深い人ならば卒倒してもおかしくないような登場だ。その無表情も相まって、本物のような雰囲気を出している。しかし、過去に何度かこいつと夜道を歩いた事があった俺は何とか気絶せずに済み、ワイトの方に駆け寄りながら、

「ワ、ワイト？ どうしたんだ、こんなところで？」

「……あなたを……待ってた」

「俺を？ …… つか、俺がアンディさんと夕飯を食いに行った事は誰にも言っていないはずだが、一体誰に　　」

「あなた達が……ギルドから出て行くところを……見かけた。……」

ただ……この時期に……あなたが……アンディさんと食事に行くのは……何かしらの事情があると……思った……から……話が終わるまで……待っていた」

……待ってた？　ここで？　俺がレストランに入ってから出るまですつと？

話し込んでたせいで、俺は二時間ぐらいレストランの中にいたはずだ。つてことは、こいつは二時間もここで待ってたのか？

夜風が肌寒いこんなところで。独りでずっと。確かに俺達は他言無用な話をしており、入ってこれても困っただろうが、しかしここまで気が利きすぎるといえるものだろうか　　いや、わざわざ待たせてもらったなら、なおさら早く本題に入るべきか。

俺は嘆息しつつ、

「……で、用件は何だ？」

ワイトは俺の心うちを読み取ろうとするように、まじまじと俺の

顔を見てきて、

「さつきギルドで……カザミドリ殲滅に……本格的に乗り出す旨を……伝えられて……きた。……賞金稼ぎ総動員で……戦いを……挑むと。……そして……このタイミングで……アンディさんと……あなたが……会食したことから……あなたが何を言われたかは……明白。……あなたは重責を……担わされる。……つまり……作戦の本部隊に……組み込まれると……いうこと」

「へえ……鋭いじゃないか」

俺は感嘆しながら答えた。

……いや、感心していいのか？ こいつにばれてるってことは、他の人間にも筒抜けってことじゃないだろうか？ それはちとマズくないか？ ……いやまあ、それはないか。いくら俺とアンディさんがこのタイミングで会ってたからって、ろくに実績もない俺が作戦の重要な役割を任されるなんて想像もできないだろう。こいつはただ、俺の素性を知っているからこそ、そしてまた、アンディさんも俺について知っている、ということを知っているからこそ、そういう憶測がたつたに過ぎない。やはり、まだ問題は無いだろう。

俺は自分の中でそう結論付けつつ、再度ワイトの方を見ながら、
「……まあ、お前になら言っても構わないだろう。そうだ。その通りだ。カザミドリ本隊への潜入部隊に加わるよう誘われたが、それがどうした？ 何か問題あるのか？」

俺の質問に、ワイトは視線を落とした。そしていくらかの間をとった後、ぽつりと、

「行かないで……欲しい」

そんな言葉を、声にする。

「……今日……左手に義手を……繋げて……もらった。……繋げたばかりで……まだ……思うように……動かせ……ない。……馴染む

までには……時間が……かかる。……到底……その仕事には……加われ……ない。……カザミドリ殲滅作戦には……間に合わない。……私は……あなたを……サポート……できない」

「……いや、お前が俺のために動いてくれるのは嬉しいが、そこまです義務感を感じなくてもいいって。別に俺のピンチにお前が不在だったとしても、そのせいで俺がお前を見限るなんてことは、絶対にな」

「違う。……そうじゃない……それは関係ない」

ワイトはぶんぶんと首を振り、

「……カザミドリは……十数年間……国の圧力を退けて……犯罪に……犯罪を……重ねてきた……集団。……あのイヴァリーのような人間が……何人も……集まった……結社。……あいつらは……人を……人とも……思っていない。……仲間すら……簡単に……見限る。……数年間……あいつらを間近で見ていた私は……知って……いる。……あんな奴らを相手にするのは……危なすぎる。……いくらあたでも……危険……すぎる。……ロットのことは……ウェリィに……聞いた。……あなたには……ロットと同じ末路を……たどって欲しく……ない。……だから……行かないで」

そう言っ、ワイトは真っ直ぐに俺の顔を見据える。心なしか潤んでいるようにも見えるその瞳で、じつと俺を見つめてくる。

行かないで、か。

何だか、戦争への召集命令を受け取った夫婦のような会話だが
実際問題、似たような状況なのかもしれないが　しかし決定的に違うのは、むしろ俺の本来の居場所が殺し合いの場である、ということ。俺はそういう道にいる両親から生まれ、そういう道にいる従兄弟に育てられてきたんだ。そこにいるのが自然で、当然なんだから、どんな理由も理由として成り立たない。成り立ちはしない。

「……いや、まあ、気持ちはありがたいが」

俺は頭をかきながら、

「ただ、やっぱり行くよ。アンディさんに直々にお問い合わせなんだし。それに、危険なミッションだからこそ、逆に周囲には物凄い人達がいるんだ。話じゃ、ランキング上位の人間が七、八人加わるらしい。だから、九十九パーセント生き残れないとか、そんな難しい仕事じゃないはずだ。相手が相手だから心配なのは分かるが、そこまで憂うほどじゃない。大丈夫だ」

「……そう」

ぎりぎり聞き取れるくらいの声で呟きながら、ワイトは視線を落とした。

「……あなたの意思が……あるなら……私には……それ以上……言う言葉は……ない。……懇願はできても……強制は……できない。」

……それは……あなたの自由。……仕方ない」

……思いの外あっさりと引いたな。普通ならもう少し食い下がりそうなものだが。……しかしまあ、これがワイトのいいところでもある。

俺が納得していると、ワイトは言葉を続けて、

「……私は強制できない。……だからもう一つ……お願い……させて。……できるだけ……できるだけ危険な状況に……陥らないで。」

……生きるために最良の選択を……して」

「あ、ああ。……分かったよ」

俺の目の前、再度顔を上げて俺を見つめてくるワイトに、俺は気圧されるように答えた。切羽詰った表情。まるで俺がいなくなったら生きられないとも言つように……。

あなたを守る自由があつて幸せ

私を見限らないで

ふいにリフレインする、いつかのワイトのセリフ。

……まさかこいつは、俺がギルドを辞めた後でも、俺に関わろうとするのだろうか。闇で動く俺に連れ立とうとするのだろうか。ボーダーラインを超えてくるだろうか。俺を追って、こいつも闇の世界を

いや、それはないか。

きつとウェリイが止める。止めてくれる。

ワイトの居場所は、まだここだ。ギルドだ。まだこいつはボーダーラインを超えていない。こちら側の人間じゃない。いびつな過去があるうとも、町の裏路地に住んでいようとも、まだまだ日の当たる場所で生活する権利を有している。

俺がこの街から消えても、きつとウェリイやギーン達と一緒に楽しく生きていける。暮らしていける。それがワイトのため。俺のため。お互いのため。みんなのためだ。

こいつに俺がさよならを言う時、一体どんな顔をするのか、簡単に想像できる。今のような無表情に寂しそうな雰囲気混ぜ合わせた顔で、一度だけ懇願してくるだろう。行かないでと言ってくるだろう。そして　それだけで終わるだろう。

それがワイトのいいところだ。

果たして、俺はいつそれをこいつに伝えるべきか。カザミドリ殲滅作戦に加わる前？　終わった後？　それとも街を出た後に手紙で知らせるか？　あるいは、何も言わずにおくか？　どれがお互いにとってベストだろうか？

そんなことを、ワイトを正面に据えたまま、棒立ちで考えていると、ふと　ふと、ワイトの顔が段々近づいてくるのに気付いた。水面のようなその瞳が、俺の目の真正面に来て、さらに近づいて、近づいて、近づいてくる。

俺は動けない　動かない。

やがて俺の視界は、すべてがワイトの表情だけになった。

「……私の………ために………生きて………いて………」

そんな吐息のような呟きと共に、眼前で閉じられるワイトの瞳

その雪のような肌の色に反して、唇は温かった。

第十二話

「こつちよ！ 早く！」

何やら高級そうな石の壁に挟まれた回廊。前後左右には俺達しかおらず、足音がやたら反響している中、俺達の先頭を走るムツナが、振り返りながら呼びかけてくる。

俺は背中につきしりとかかっている大剣の重量に耐えつつ、それを追いかけてながら、

「……なあ、こつちで合ってるのか？ 俺達が目指してるのは『銀石』の保管庫だぞ？ 倉庫だぞ？ 倉庫って言ったら、普通、飾り気がないもんだろ。なのに、進めば進むほど壁の装飾品が増えてるじゃないか……。おい、本当に合ってるのか？」

「う、うん。……多分」

視線をそらすように、首を前へ向けながら答えるムツナ。

……いや、多分で。

ここまで走ってきたのが無駄足だとか、そんなオチは困るぞ。なんせ、今回俺はロットの剣『グレン』をわざわざ持ってきたんだ。それを背負ったまま走ってるんだ。これがやたらと重くて、もう余分な持久力なんか残ってない。来た道を戻るとか、そんなのは勘弁だ。……というか、ロットはよくもまあこんな重たいもんを担いで年がら年中走り回ってたもんだ。

俺は少しばかり息を切らしながら、

「おい。敵陣のど真ん中で迷子なんて、シャレにならないぞ。そんなの即ゲームオーバーだろ。潜入して三十分も走りっぱなしなんだもつ、どこから来たかなんて覚えてねえよ。お前が持つてる見取り図だけが頼りなんだからな。頼むぞ？ 本当に大丈夫なのか？」

「ええ、恐らくこちらで間違いないでしょう」

ふいに、前方のムツナではなく、俺の隣を走るギーンが答えてきた。

「壁や床の汚れ具合から見ても、この辺りは人通りが少ないことが見て取れます。つまり、この先に入るのは限られた人間だけ重要なものがこの先に置いてあることは間違いないでしょう」

「そ、そう！　そうよ！　それを私も言いたかったの！」

振り返りながら、ひきつった笑顔で言ってくるムツナ。……ウソつけ。さっきまでやたらと地図を回転させるばかりで、廊下の様子なんて見る素振りもなかったじゃないか。

……しかしまあ、ギーンの保障がついたことで少しばかり安心した。やっぱりギーンは頼りになる。このままちゃんと『銀石』の保管庫にたどり着き、そこにある『石』を全部押収してしまえば、俺達の職務は完遂される。

カザミドリ本隊殲滅作戦。

これに組み込まれた俺達のミッションは、あくまで戦闘ではない。まあ当然だろう。ここはカザミドリの本隊。中規模な組織でならトップになれるような猛者が何人もいるんだ。そんな強者を相手に剣技に秀でたロットならいざ知らず　俺達みたいな別段戦闘が得手でもない人間が真つ向勝負を命令されるわけもない。

その辺りは全部、現在ここに集結しているランキング上位の七名の賞金稼ぎが相手をしてくれる。

敵がそこに戦力を割いている最中に、俺達は隙をついて、敵の虎の子を確保すればいい。敵を避けて、逃げて、『銀石』の保管庫にたどり着ければいい。それだけが俺達の任務だ。

幸い、本職が情報屋であるムツナが手に入れた（裏ルートを経由して入手したそうだ。本作戦に加わっている上級賞金稼ぎの人の協力を得て、何とか確保したらしい）この建物の見取り図がある。それを頼りに保管庫へと向かえばいいだけだ。敵との遭遇にさえ気をつけていれば、それ以外に問題はない。

カザミドリの本陣に突入ということで、一体どうなることかと思

つていたが、思ったよりもすんなり進みそうだ。現在の俺は緊張もしていないし、不安も抱えていない。むしろ気が抜けてるくらいだ。それというのも、今回のメンバーが見知ったというか見飽きたメンツばかりで

「おっと。分かれ道ですよ。どうします、ムツナさん？」

「ええと、ここは右ね」

ギーンからの呼びかけに、ムツナは図面を見下ろしながら答えた。そして、そのＴ字路を曲がった瞬間

「こっから先は行かせねえ！」

叫び声と共に、逆立った髪と釣り上がった目をした男が正面に現れた。

タイミングを合わせていたように、振りかざしていた斧を先頭のムツナに向かって勢いよく振り下ろしてくる。

俺は急停止しつつ、反射的に腰元のナイフに手をかけたが、それを取り出す前に、

「とりゃあっ」

「邪魔です！」

そんな声が俺のすぐ後方から響き、ついで青い弾丸と黄色い電光が釣り目の男に向かっていく。

斧が振り下ろされる前に、後方へ数メートル吹き飛ばされる大男。床に衝突して、それ以上動かなくなった。右半身は氷付け。左半身からは黒い煙が昇っている。

俺がちらりと振り返ると、青い銃を構えたルーと、黄色いロッドを握ったウェリイ。双方とも鼻息を荒くして、その気絶男を見下ろしている。

ルーは黒目だけを左側に動かしながら、

「……ふん。余計なことしないでよ、スパゲッティ。あたし一人でもどつにでもなるんだから。むしろ邪魔よ。家で引きこもってれば

いいのに」

「あーら、何をおっしゃいますやら。わたくしにはロット様の仇を討つという使命があるのですから。引きこもったりはいたしません。必ずやここで、敵将の首を討ち取って差し上げるのです。……そちらこそ、ギルドを辞めるんじゃないやなかつたのですか？」

「ま、まだ辞めないよ！ ロットの他にも、カザミドリは絶対潰してやるんだから！ それに、保護者として、ダルクをこれ以上危険なところに単独で行かせられないもん」

……いつからお前は俺の保護者になったんだ。

こんなシリアスな仕事にこのメンバーは場違いな気がしないでもないが、しかしまあ、なってしまったものはしょうがない。成り行きというか、なし崩し的に、この五人が集まってしまったのである。俺とギーンは、アンディさんの推薦。

ムツナは、元々つてがあり見取り図入手の時にも世話になったという上級賞金稼ぎ、ヒマリさんの推薦。

そしてルーとウエリイは、組むなら見知った人間の方がいいと言うムツナの推薦である。

時と場所が変わっても、顔ぶれも会話も雰囲気も変わらないメンバーだ。いまいち いや、正直に言えば、まったくもって俺は緊張感が保てない。保てていない。

「というか、いい加減スパゲッティなる呼称はやめてください。この絹のような髪を食べ物に例えるなんて言語道断ですわ。まったく、食い意地が張りつばなしですわねえ、カップパは」

「そ、そっちこそカップパ言うのやめなさいよ！ あ、あたし知ってるんだからね！ カップパが頭にお皿が乗ってる変な生き物だって！ ちゃんとダルクに教わったんだから！ そんなの、あたしに全然似てないもん！」

「うふふふ。ぴったりじゃないですか。食い意地が張ってるから、頭からお皿が取れなくなってしまうたんでしょう？」

「違うもん！ 何よ！ そっちこそ、ちぢれたラーメンみたいな頭

のくせに！」

「ち、ちぢれたラーメンツ？ スパゲッティの次はラーメンとは！
訂正なさい！ この、言うに事欠いて」

「……はあ」

俺は二人の相変わらずのやり取りを眺め、嘆息した。

……まあいい。理由はどうあれ、とにかく二人とも本調子を取り戻してくれたみたいだし。気を揉む要素が一つ減ってくれたと考えれば、いくらか救われる。

「とにかく、先に進むぞ」

四人に呼びかけるように言いつつ、俺は再度走り出した。

そして回廊をさらに五分ほど走った後、目の前に扉が現れた。

爆弾でもこじ開けられそうにないくらい、分厚く重そうな鉄の扉。幅も高さも十メートルくらいあるだろう。そしてその表面には鳥や馬やらが彫られていて、周囲の壁以上に豪華な造りになっている。俺はその扉を見上げながら、

「これが倉庫の扉か？ つうか、こんな扉開くのか？」

「……押してみしよう」

俺の横、ギーンが早速ドアを両手で押し開き始めた。すると

すうっと、意外にもすんなりと扉は開かれた。

そのできた隙間から、中へと歩を進めていく俺達五人。

その扉の向こうにあったのは、『銀石』でも『白石』でも『黒石』でもなく　人、人、人、人、人。

各々武器を構えた人間ばかりだった。

扉から入ってきた俺達を囲むように　まるで待ち構えていたかのように　概算で六十人くらいの人間が、半円状に隊形を組んでいる。全員が全員、にやにやと、いやらしい笑いを浮かべている。

これは、罨！

思わず後方へ下がろうとしたが、ボタンと、扉は閉まった。

「ちよつ、待って！」

慌ててウエリイが扉を開けようとする　が、動かない　扉はもはやただの壁になり　俺達は完全に退路を絶たれた。

絶対的な袋のネズミの状態。　滲み溢れる危機感。　圧迫感。　焦燥感。　絶望感。

……どうする？　どうする？　どうすればいい？

混乱する頭を無理矢理回転させながら、ふと前方を見ると、一人だけ椅子に座り、周囲の人間とは明らかに異質なまがましい空気をまとった男が目に入った。

黒いくせつ毛。頬に大きな傷。黒いあごひげ。黒いマント。紺色のYシャツ、ズボン。腰元には黒い剣の鞘。

そんな男が、俺達の真正面で俺達に相對している。ニカリと笑っている。

俺とこの男は初対面。

しかし　俺はこの男を知っている。

ギルドの掲示板にいつも張り出されている顔。俺が登録する前から　そしていまだにずっと　WANTEDの文字と共に示されている男。この男こそが　盜賊として世界に名をとどろかせ、

国王以上に顔を知られた、ロットの両親の仇でもある

ヒューミッド＝シラン

……そうだ。そんな噂も流れていた。そうか、やっぱり本当に

「ヒューミッド、貴様がカザミドリのトップだったのか……」

「むはははははは！　そうだ。その通りだ、若造」

ヒューミッドはあごひげを揺らしながら、愉快そうに笑った。

「そうか、私の顔はこんなガキにまで知られているのか。有名人と
いうのも困ったものだ……。むははは。だが、喜べ、若造！ そ
れを知ったのは、我がカザミドリ内部の人間以外ではお前らが最初
だ！ 光栄に思うがいい、哀れな捕虜共よ！ むははははははは
はは！」

捕虜。

……そうか。こいつらの狙いはそれか。ランキング上位の賞金稼
ぎを迎撃する前に、俺達をとっ捕まえて人質にするつもりだったの
か。偽の見取り図を流しておけば誘導することも可能だろうし。…
…というか、どうしてこいつらは俺達がここに来ると読めたんだ？
……いや、そんなことを考えるのは後だ。ここで俺達が捕まっ
ては、アンディさん達に迷惑がかかる。作戦に支障が出る。どうにか
してこの危機を脱しないと。

俺は何か作戦を練ろうと、後ろの四人を振り返ろうとした
が、その中で、ムツナがいきなり前方へと歩き出してきた。
俺の横を通り過ぎ、さらに前へと進んで行く。

スタスタと、物怖じすることもなく歩を進める。

まるでここが自分の庭であるかのように歩いていく。

そしてヒューミッドの正面までたどり着いたムツナは、青紫のセ
ミロングの髪を振りながら、くるりと俺達の方を振り返った。

その顔には、ホストファミリイが来客を歓迎するがとき微笑。
そして一言

「うふふ。ようこそ、みなさん。カザミドリ本部、不死鳥の間
へ」

第十三話

「ちょ……ちょっと、ムツナ。……ど、どういことですか……」
そのムツナの予想外の行動に、ウェリイが口をぱくぱくさせながら疑問を口にする。

「……あなた、な、何でそちら側に行くんです？ そんな、それじゃ、まるで」

「うふふ。そうよ、ウェリイさん。スパイって呼び方は安っぽくてあんまり気に入らないし、できれば内通者とだけ呼んで欲しいんだけど。……うふふ。そうなのよ。私はね、実はカザミドリの人間

カザミドリ五番隊の副隊長なの」

ムツナはしたり顔で言うてくる。

その発言と同時に、ウェリイが膝からぺたんと崩れ落ちた。肩を落とし、目の焦点が宙を舞っている。

その傍らに立っているギーンが、

「……ということは、僕達がここにたどり着いたのも、道に迷ったからではなく、あなたが誘導したから、ということですか？」

「うふふ。もちろんそうよ。私自身もこの建物に入るの初めてだったし、おまけに広いからね。危うく迷いそうになったけど、予定通り、ちゃんとここにたどり着けたわ」

睨みつけながら言うギーンに、ムツナは依然笑顔のまま返してくる。

「……僕がその図面を見せてもらった時は、確かこの辺りはちゃんと研究施設になってたはず。つまり、その図面からしてフェイクだったと、そういうわけですか。……ということは、あなたにその見取り図を渡したヒマリさんも俄然怪しいですね。彼もカザミドリの人間だったと……。ふん、さらに言うなら、コロノ山の調査員の捜

査の仕事の際、イヴァリーにあの場所を教えたのはあなた。そして、以前あなたが僕にチームを組もうと言ってきたのも、つまりは僕をカザミドリに誘う布石の一つだったってことですか」

「うふふふ。さすがギーン君。冷静ね。よくもまあ、こんな状況で、的確に推察できるものだわ。やっぱり私が見込んだ通りよ」

「……あなたに褒められても嬉しくありません」

ムツナの賛辞に、ギーンは憮然と答える。

ふと、ギーンが俺の隣にそろりと近づいてきて、

「……これは相手の人数が多すぎます。四人で全員を相手にするのは無理でしょう。ですから、一点突破を狙ってそこから逃げるのが最も生存確率が高いと思われます。逆に向こうの人数が多いことを逆手にとるんです。我々が固まっていれば、我々に攻撃できる人間は限られてくる。そして攻撃したくてもできない人間でこの場が混乱してくる。そこをうまくつけば、あるいは」

「むははははは！ 心配には及ばん！ ここにいる奴らはただの壁だ。貴様らが逃げないための、な。貴様らの相手には、それなりの奴をちゃんと用意してやった。感謝しろ」

イスにふんぞり返りながら高笑いするヒューミッド。ひとしきり笑い終えたところでパチンと指を鳴らすと、人だかりの中から三つの人影が現れた。

そのうちの二人は、俺は知らない。見たこともない。ただ、その体格、眼光から只者ではないことだけは分かる。ヒューミッドほどではないにしても、それだけの雰囲気を持った奴だった。

しかし、問題はそれ以外のもう一人。

そいつは、俺達とほとんど変わらないような身長。黒いニット帽から紫色の髪を覗かせ、Ｔシャツにハーフパンツ、サンダルを履き、首からチェーンを提げた。しかし、ケガが完治していないように、腕や足や顔の六割が包帯巻きになっている。少年。その見覚えのある服装は、まごうことなき

「……イヴァリイイ！」

そんな叫び声と共に、俺の横、ウェリイがロッドを握り締め前へ駆け出そうとする。

俺は慌てて腕を伸ばし、それを制して、

「おい！ 待て、ウェリイ！」

「うるさい！ どきなさい！ あいつは、あいつだけは」

「だから待てて！ 無闇に行くな！」

「待てません！ あいつはロット様の仇」

「下手に突っ込んだら、向こうの思う壺だ！ 危険なだけだ！ 死ぬだけだ！」

俺の声を荒げた説得に、ウェリイはぎりつと唇を噛んだ。そしてふっと、俺の背中の『グレン』を眺め、

「……そうでしたわね。自分では勝てないからと、あなたに敵討ちを頼んだのはわたくしでしたね。………取り乱しました。すいません」

ようやくウェリイは平静を取り戻し、一步下がった。

俺は安堵で嘆息しつつ、顔を上げ再度ムツナの方を見る。

ムツナは含み笑いで、

「うふふ。別に突っ込んで来ようが来まいが、結果は同じなのに。

……で、どうするの？ そちらにはもう打つ手はないでしょう？

おとなしくしてるなら、それなりに扱ってあげないこともないけど？」

「バカ言うな」

俺は答えながら、背中から大剣『グレン』を降ろした。

「……ったく、こりやもう、重り以外の何物でもないな。ここまで運ぶのにどれだけ苦労したか……」

「……？ それを降ろして、どうする気？ まさかそれを使ってあなたが戦うの？ それとも、戦うのに邪魔だとか？」

「……こうするんだ、よ！」

言いながら、俺は『グレン』を前方に放り投げた。クルクルと回転しながら、宙で放物線を描く大剣。

その行動の意味が分からないのだろう、ムツナも、ヒューミッドも、それ以外のカザミドリの人間も、そしてウェリイとルーも、皆が皆ポカンとその軌道を眺めている。

その着地点であるう位置にいるのは、黒いニット帽と紫の髪の男。そいつは おもむろにニット帽を脱ぎ、その下の紫色のウィッグも外し、首にかかったチェーンも投げ捨て、顔を覆っていた包帯も捨て去った。その下から現れたのは

赤い短髪と、やたらに尊大な笑い顔！

その様変わりに驚く周囲の人間の中、そいつは『グレン』の柄をぱしりと握ると、そのまま鞘から抜き去った。

そしてその両隣で呆然としたままの二人のカザミドリ幹部を、各々一太刀ずつで切り伏せる。

そしてそしてそして、停止する間もなくそいつは『グレン』を振りかぶり、一連の流れで、

「火炎斬鉄 ！」

叫びながら『グレン』に炎を灯し、椅子の上のヒューミッドに向かってその斬撃を放った。

反射的にヒューミッドは腰から剣を引き抜き、その攻撃を受け止める が、

「ぐうつ……」

勢いを殺しきれず、そのまま後ろへ弾き飛ばされた。

木製の棚に激突し、粉塵が舞う中、ヒューミッドはよろよろと立ち上がりながら、

「な、なんだ、貴様は？ お前はイヴァリーニシャルでは……？」
しかし、赤髪のそいつは相変わらぬ尊大な笑顔のまま、メラメラと燃え盛る『グレン』の剣先をヒューミッドに向けて、

「あっははははははは！ 我こそはアステルの赤き勇者、ロタード

「レーム！　ここで会ったが十年目！　覚悟せい！　我が宿敵、ヒューミッドー！」

第十四話

「たあー！」

振り下ろされるロットの『グレン』。

ガキンッ

額の上、ヒューミッドがそれを受け止める。赤と黒の刃が交錯。ぐぐぐ、という競り合いの後　カキンッ　双方剣を振り抜き、後方へ跳んだ。

ロットとヒューミッド、お互い距離をとり、睨み合いながら、

「……貴様、イヴァリーに成りすまして潜入しておったのか！」

「わははは。当然だ。私の潜入スキルを持っていれば、造作もないことだ」

……いや別に、この潜入が成功した要因はそこじゃないだろうに。この展開に水を差すのもアレなので、いちいちつっこみはしないが。……おのれー！　なめおって、この若造が！　我が直々にあの世へ送ってやる！」

覇氣のこもった叫び声と共に、ヒューミッドが前へと駆けでる。目で追うのがやっとのスピード。黒い剣を上段へ振り上げ、そして直下へと振りきった。

風を切る剣の残像。

ロットは反射的に右へと跳ぶ。わずかに数センチの余裕。ギリギリのタイミングだ。赤い髪と服の切れ端が持つていかれている。

数メートル離れた位置にすたんと着地し、片膝をついたロットは、ニヒルに笑いながら、

「……ふん！　一千万の賞金も伊達ではないようだが　しかし、まだまだだ！」

炎が揺らめく『グレン』を下段左に構えるロット。そのまま一歩踏み出し、

「　火炎斬空　！」

ロツトの周囲に赤い剣筋が描かれる。

同時に、巻き起こる熱風。

数十メートル離れている俺のところまで届く風圧。俺は思わず腕で顔をかばった。

が、剣風の真正面にいたヒューミッドにはそれが直撃。

「ぐっ」

ドゴンッ

そのまま吹き飛ばされ、隣室へ続く扉へ激突。そのままその中へ消えていった。

ロツトはさらに床を蹴って、

「一気に決着をつけてやる！」

と、ヒューミッドを追って扉をぐぐり、隣の部屋へと走り去っていた。

俺もそれを追って加勢してやろうかとも思ったが、やめた。ここにも敵襲がいるし、それに 王道は王道同士、正統的主人公は正統的黒幕と雌雄を決するのが筋だろう。俺の出る幕じゃない。

まだ状況に思考がついてきていない人間の中、俺は胸ポケットからランシーバーを取り出し、

「 もしもし、アンディさん、こちらダルクですが」

『 おう、アンディだ。どうした？ 倉庫に着いたか？ 』

「 いえ。どころか、敵陣のど真ん中に着いてしまいました。六十人強の敵襲に囲まれて、ロツトがカザミドリのトップ、ヒューミッドと交戦中です」

『 そうか。……ちゅうか、やっぱヒューミッドがカザミドリの大将だったわけか 』

「 はい。やはり、ムツナがカザミドリの内通者でしたよ。見取り図にフェイクが混じっていました。……そっちのヒマリさんも、どうやらカザミドリの人間だったらしいです」

『 そうか。さっきから姿が見えないんで、そうじゃないかとは思ってたが。……了解だ。俺達もすぐそっちへ行く。それまであんま

「深追いするなよ」

「分かりました」

そう答えて、俺はトランシーバーを切った。

胸ポケットにしまいながら、ふと視線を上げると、

「……ど、どういうことなのよ……？」

ようやく、ムツナが口を開けた。

「どういうこと？ ……な、何でイヴがロット君なの？ ……というか、何でロット君が生きてるのよ？ コロノ山で死んだはずでしょ？」

「……お前はさっき何を見てたんだ。あの通り、ピンピンしてたじゃないか。やかましいくらいにな」

「だって、そんな、おかしいじゃない。あの丘でロット君の死体を見たし、あれは『橙石』の幻覚でもなかったし……。じゃ、じゃあ、一体あれは何だったのよ？」

「そんなん、明白だろう」

俺は肩を持ち上げながら、

「俺もお前もルーもギーンもアンディさんも、そしてロットも生きていた。とすると、あの首切り死体は イヴに決まってるじゃないか」

「な……！」

ムツナは そしてルーとウエリイも 目を見開く。ギーンだけは口元を歪める程度だが。

「そ、そんな……いや、確かに、装備品さえ付け替えれば、あの状況は作れるけど……でも、それじゃあ、ロット君が一人であんな偽装をしたっていうの？ そ、そんな、何で」

「……別に、協力者がいてもおかしくはないだろう」

「そ、そんな、ありえないじゃない！ だって、ロット君とイヴが戦ったのは嵐が吹き荒れてる間。その時、その二人以外はみんな口ツジの中にいたわ。誰も協力できるわけじゃないじゃない」

「……ふん、面白いほどキレイに騙されてくれてるな。…… ロッ

トとイヴが戦つてたのは嵐が吹き荒れてる間だけ　　っていうのは、何か根拠はあるのか？」

「へ？　……だって、そんな、当たり前じゃない。死体が丘の上にあつて、つり橋が吹き飛ばされてたんだから。つり橋が切れたのは、嵐のせいだ　　って、あ……」

「……ふん、ようやく気づいたか」

思い至つたように口を丸く開けたムツナに、俺は嘆息しながら言う。

「確かにロープはちぎれてたが、それは強風のせいとは限らない。人為的に引きちぎつた可能性　だってあるだろう」

「で、でも、それじゃあ、一体いつ……」

「覚えてないか？　あつただろう？　俺達がロッジを飛び出してから、あの丘に全員が集まるまでの三十分間。その間に発見し、作戦を取り決め、再度分散するのは不可能じゃない」

「そ、それはそうだけど……」

まだ納得がいていないような表情で、ムツナは呟いた。

「でも、わけがわからない。あの時、あの時点で、な、何であなたがそんなことをするのよ？　意味がわからないじゃない」

「『何で』だって？　決まつてるだろ。ロットにカザミドリ潜入をさせるため。潜入の成功率を上げるため　　そう、　お前をだまくらかすため　さ」

……そう。あの時から、俺は　ムツナが内通者である可能性　も考えていたんだ。

その根拠、というか足がかりはいくつかあつた。

一つは、ムツナがギーン一人と　ウェリイ達と離れて　チームを組もうと提案してきたこと。別にギーンと組みたいだけならば、四人のチームを組んでも問題はないはずだ。むしろ四人組の方が戦力が期待できる。なぜギーン一人と組みたがるのか、その真意がいまいちよく分からなかった。

しかし、俺は聞いていた

カザミドリは、将来有望な人

間に正体を隠して近づき、勧誘していくこと

つまりムツナは、ギーンをカザミドリに勧誘するためにチームを組もうと言ってきたんじゃないのか。そう考えればすっきりする。以前勧誘をつっぱねたウエリイと、カザミドリの試験体であったワイトが邪魔になるのは明白だ。だから、ムツナはウエリイとワイトを度外視したんだ。

そしてもう一つ、俺がムツナを疑った根拠は、ウエリイに喫茶店に呼び出された際、イヴとムツナの情報のやりとりが思いの外迅速だったことだ。

元々、イヴは闇で動く人間。本人曰く、顔と名前が一致しているのは、カザミドリでも二、三人しかいないような人種なのだ。そんな人間と頻繁に連絡が取れるムツナは、一体何者なんだろう？　そこまでコネクションが太いなら、カザミドリ討伐への足がかりに使われそうなものだろうに。それでもイヴとのコネクションが継続できる理由は何なのか？　俺はそんな疑問を持ったのだった。

そして最後、三つ目の根拠は、イヴがコロノ山に侵入してきたことだ。

あの時、俺達はアステルで集合しコロノ山に向かったわけだが、あの仕事は一両日で決定されたものだ。部外者がその細部を調べるのには時間が不十分だっただろう。しかも、移動にはアンディさんが帯同していた。そんな中、俺達の追跡がそう簡単に成功するとも思えない。つまり俺達の中に、仕事の場所、メンバーをリークしている人間がいるんじゃないかと、俺は疑った　　というか、この疑問が、俺の中での「ムツナはカザミドリの人間」という仮説の発端だったわけだが。

しかし、俺はそれほど確信があったわけじゃない。

そこまでシリアスに考えてたわけじゃない。

あくまで可能性の一つ。

例えば「死後の世界は、科学的根拠はないが、存在する可能性だつてある」というテーゼと同じような、一つの仮定にすぎない。一

生懸命疑つてたわけじゃない。

ただ、俺はこの仮説をアンディさんに話してしまったのだ。

そしてアンディさんが、予想外にも同調してきたのだ。

アンディさんが、ムツナを逆に欺く作戦を提案してきたのだ。

あのコロノ山の台地で、イヴの死体を前に、アンディさんが俺とロットに言ってきた。

『これを知った時、あいつら特にルーとウエリイがどういう反応するかは、大体予想がつく。多分、見る方も苦しくなるようなことになるだろう。……ただ、お前らだけは降りないでくれ。カザミドリを討つために、お前らだけは戦い続けてくれ。頼む。この通りだっ』

そう言つてアンディさんは、子供でしかない、新米でしかない、自分の半分程度しか生きていない、人生経験すらままならない俺達に、深々と頭を下げてきた。世界に名だたる賞金稼ぎが、俺とロットに懇願してきたんだ。

そこまでされたら、俺は、俺は　　のるしかないだろう。

正直なところ、俺自身としてはついさっきまで、ムツナのこととは八割方信じていた。カザミドリの人間ではないと思っていた。そもそも、証拠は何もなかったんだから。

だが、アンディさんの熱意に負けて　それに、目上の人の命令を無下にできるわけもなく　俺もこの作戦にのつたのである。

結果として、これで大正解だったわけだが。

「……イヴと深い繋がりがある人間が、カザミドリの中でも極めて少ないことは、あいつの口から聞いていた。だから、別口から手に入れた情報と、変装　あまりしゃべれないような状況を作るような変装　をすれば、潜入自体は不可能じゃなかった。だが、その成功率を上げるため、お前を騙し　お前に、イヴが生きっていると証言させることで　疑われないようにしたわけだ」

「そ……そんな……うそ。……だ、だって、ルーちゃんもウエリイさんも、本気で驚いて、泣いてたじゃ……」

「そりゃ、そうだ。二人にも言っただけじゃなかったんだから」

……いや、二人には悪いことをしたと思っている。あんなに悲しませ、傷つけてしまったんだから。

しかし、アンディさんが断固として譲らなかったのだ。他のメンバーにはこの真実を教えないと。この出来事をよりリアルにするため　ムツナを本格的にだますため　他の三人まで騙したのだ。敵を騙すにはまず味方からとはよく言うが　それにしたって、限度があると思ったが。

実際のところ、コロノ山から帰ってきてからそれをルーとウエリイに教える、という選択肢もあったことにはあった　というか、俺は最初からそのつもりだった　が、アステルに帰ってから、ムツナが二人につきつきりになるようになったのだ。強引に。看病と称して。

そしてあるうことが、ヒマリなる上級賞金稼ぎのコネを使ってムツナがこの作戦でまで俺達に関ってきたため、今の今まで　この作戦の真意を果たすこの瞬間まで　他のメンバーには言えずじまだったのである。……もっとも、ギーンだけはそれとなく気付いていたようだ。

ちらりと首を後ろに向けると、ギーンは平然と立っている。

その顔には驚きは欠片も浮かんでなく、相変わらずのこましゃくれた微笑が浮かんでいる。……まったく、末恐ろしい奴だ。どこまで見透かしてるのか。おかげで　こいつが端々で俺のことをおもんぱかってくれていたおかげで　俺としても動きやすかったのも事実だが。

「じゃ、じゃあ……私達は、あなた達の手の上で踊っていたと……そういうこと、なの？」

「まあ、そんなとこだ」

脱力しながら言うムツナに、俺は何ともなしにこたえる。……厳

密に言うなら、アンディさんの手の上だがね。俺自身は、こいつがヒューミッドの方へすたすたと歩き始めるまでは、確信は持っていないかったんだ。

「……い、いや、それにしても、おかしいわ。だって、丘の上のイヴの死体には外傷は何もなかった。そして首は、『黒石』の刃で切られてた。いくらなんでもこれはおかしいわよ。これじゃ、ロット君は外傷を与えることなくイヴから『フェム』を奪い去り、その刃で一撃でイヴの首を切ったってことになるじゃない。私達がロッジにいる最中に、二人の決闘は始まってたんだし……。そこまであの二人に実力差があるなんて、そんなわけ……」

「……じゃあ、『黒石』の武器が他にあればいいだろ？」

「そ、そんなわけないじゃない。『黒石』は私達がほとんど独占してるわ。強いて言うなら『闇蛇』あたりが持つてるけど。でも、あいつは最近なりを潜めているし、この件に関わってくるなんて考えられない。他に、『黒石』の武器なんて……」

と言ったところで、はっと、ムツナが息を漏らした。

まるで初めて地動説を聞かされた数千年前の人間のように、驚愕の表情を浮かべ、

「ま、まさか……」

震える声で呟くムツナ。そしてわなわなと、俺を見上げてくる。

……正直、俺はこの時点まで迷っていた。

これ を言わなくてもいいんじゃないか？ 明らかにする必要もないんじゃないか？ このまま、今のままで、もう少し生きていくんじゃないか？ ギルドの仕事を続けられるんじゃないか？ そういう方法もあるんじゃないか？ そう思った。思っていた。

しかし、すぐに思い直す。

このこと はすでにロットには教えてある。恐らくギーンも感づいているだろう。そしてここまで話してしまった以上、ルーとウェリイにも話すことになる。あるいは、この作戦に参加している他の賞金稼ぎにも伝わるだろうし、カザミドリの間人が一人でも逃げお

おせてしまえば、そいつから世間に漏れてしまつことも否めない。

もう、隠し切れない。

後戻りはできない。

そうだ、最初から分かつてたことだ。

最初から割り切っていたことだ。

いまさら躊躇して何になる。

これが俺の本当の道なんだ。

ふう、と、俺は諦めのような覚悟のような息を吐いた。

そして背中ナイフホルダーから『黒石』のナイフ『ゼロ』を取り出し、それを顔の前に持ってきて 初めて自分の口から、この二つ名 を口にする

「 まあ、つまり、俺がその『闇鳥』ってことだ」

俺がそれを口にした瞬間

肩を震わせるムツナ。

あんぐりと、口をあけるルー。

瞳孔を見開くウエリィ。

そして、静まり返る他のカザミドリの人間。

……そう。つまりは、そういうことだったんだ。イヴの息の根を止めたのは、俺なんだ。『イヴの方が能力が上』みたいな言い方をしてはいたが、しかしそれは 賞金稼ぎとして。『黒石』を扱う敵に真つ向勝負で勝つのは難しい。つばぜり合いすら叶わないんだから。

しかし、こちら『黒石』を扱えるなら別問題。

そんなディスアドバンテージはなくなる。

恐らくラキとアンディさんはほとんど能力的に拮抗しており、それぞれから学んだ俺とイヴには、当初はそれほど差はなかっただろうが 向こうは数年前から鍛錬を止めている。しかし、俺はついこの前までしこかれてきた。その差は歴然。

同じ立場に立てば、あいつを一太刀で斬ることは難しくない。

『黒石』相手に攻めあぐねていたロットには困難でも、俺なら可能。俺なら容易。

逆に俺にしかできない。そういうことなんだ。そういう証拠にもなるんだ。そういうことを、俺は今、証言してしまったんだ。

俺はもう、後戻りはできない。

ここにはいらなくなる。

すべてと別れ、縁を切り、身を隠して闇の中を生きていく、

これが号砲。

これが予定通り。

これが既定路線。

これが規定路線。

しかしまあ、最後の賞金稼ぎとしての仕事は、きっちり済ませよう。

俺は一步、ムツナの方へ足を踏み出した。

その足音にびくついたムツナは、慌てて口を開け、

「な、何やってるの！ ぜ、全員で『闇鳥』を討ちなさい！」

周囲に向かって叫ぶ。

呼びかけられた六十人は、意識を取り戻すのに一拍を要した後、

「う、ウオオオオオオオー！」

怒号を鳴らして、各々武器を手に俺の方へと襲いかかってくる。

前方と右と左から、合計六十人が、敵意と殺意をまとうて向かってくる。

その六十個の刃が俺に近づいてくる。

俺を殺そうと齒向かってくる。

俺は、はあ、と一つ嘆息した。

そして、思慮なく、考慮なく、躊躇なく、遠慮なく、俺は右手に握った『ゼロ』でもって

斬って／斬って／斬って／斬って／斬って／斬って／斬って／斬って

/斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬
 つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬
 /斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬
 つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬
 /斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬
 つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬
 /斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬つて／斬

斬つた。

飛び散る飛沫も、悲鳴も、倒れ伏すものも意に介せず、俺は『ゼ口』を振り続けた。

そしてたかだか数分の後

周囲は静寂になる。

すべてが赤く染まる。

もはや、俺とギーンとムツナとルーとウェリイ以外、この部屋には動くモノは何もなくなった。

少しばかり俺の息は荒くなっているが、そこまでの労力は割いていない。ここまで『グレン』を運んでくる方が、いくらか大変だった。

ふと、視線を後ろに向けると、それに呼応してルーとウェリイがびくりと肩を震わせる。俺は、額から鮮血が滴っているのに気付いた。ぬめりと、俺は手の平でそれう拭う。このせいで二人は驚いたのか　もしくは、それだけじゃないのか、分からないが。

しかしまあ、予想通り 予定通り。

こうなるだろうとは思っていた。

いまさら後悔はしない。

それよりも、この仕事を早く終わらせてしまおう。

俺は再びムツナの方へと視線を動かした。

それに気付き
そして、その意味に思い至ったのだらう
ム

「……くっ」

立ち上がり、後方へと走り出す。そして部屋を出ていつてしまった。

俺は、背中越しに、

「……あとのことは、ギーン、頼む」

「はい。……分かりました」

期待通りのギーンの返事。あくまで冷静なその声音は、とてもありがたかった。

俺は赤く染まったままの『ゼロ』を握りなおすと そのまま、ムツナを追って部屋を出た。

第十五話（前書き）

ラストという事で長いです。すいません……。

第十五話

ムツナを追って不死鳥の間の奥の扉を出ると、その後はほぼ一本道だった。

左右にいくつかドアが並んでいたが、そこには開閉した雰囲気はない。そこにムツナが逃げ込んだとも思えない。隠れているとも思えない。ムツナはこの通路の先へ行っただろう　　と直感的に思い、俺は真っ直ぐに廊下を走っていった。

そして数分走った後、一つの部屋に突き当たった。

さっきの広間の五分の一くらいの広さ。さすがに六十人が入り乱れるには狭すぎるが、それでも十分広い。十数人くらいならこの中で何かしらの作業ができそうなものだ。

そして壁際には机が並んでおり、その上にはビーカーやフラスコ、その他何かの計測器のようなものが無造作に並べられている。ところどころ白や黒の色がついた固体も落ちていて、それらは恐らく

『石』の類だろう。

ここは『銀石』の研究所？

そんな確信に限りなく近い疑惑を抱えながら部屋を見回していると、奥にぼっと現れた人影　　口元を歪めて笑っているムツナだった。

「……うふふ。やっぱり来たわね」

「当たり前だ。お前もカザミドリの幹部の一人。逃がすわけにはいかないさ。……さあ、そろそろ観念しな。そのうちアンディさんもここへ来る。お前にはもう、抗う術はない」

「ふふ。子供ばかりのところで動いてただけあって、やはりあんた達はまだまだ甘いわね。甘すぎよ」

「何がだ」と俺が言おうとした瞬間、ムツナは右の壁に向かって赤い石を投げつけた。

ガコン　　とその石が壁にぶつかった瞬間、炎が巻き起こる。

「お、おい！ 何するんだ！」

「うっふふ。別に？ 見ての通りよ」

「見ての通りって、お前」

問答しているうちに石の炎は机上の紙に引火し、机に引火し、そしてビーカーを赤く包んだ
その瞬間、

ドゴオンッ

「うわ！」

爆発。机が吹っ飛ぶ。顔に降りかかる爆風を俺は思わず腕で遮った。この威力、まるで爆弾
いや、それ以上だ。これはまさか

「ぎ、『銀石』か！」

「うふふ。ご名答」

赤々と燃える机を笑顔で眺めながら、ムツナは平然と答える。

「この部屋は、お察しの通り『銀石』の研究所。そこら辺の容器には、生成途中、あるいは生成したばかりの『銀石』が入ってる。だから、その容器に熱を与えれば当然『銀石』が発動するわ」

「ぎ、『銀石』を発動？ そんなことして、お前、一体」

「『何をするつもりなんだ』？ うふふ。決まってるじゃない。この基地をすべて消すのよ」

……基地を……消す？

「ええ。ここにある『銀石』だけでも、この周囲数百メートルを消し去るには十分だろうし、地下に保管されてるやつも連鎖的に反応すれば、全部あとかたもなく消えるでしょう。……このままじゃあ、この基地が賞金稼ぎに潰されるのも時間の問題だし。それに辛うじて生き延びたとしても、ロット君に色んな情報をリークされた後じゃ、どのみち力ザミドリは長くないわ。だったら、ここが引き際としてちようどいいじゃない」

「ちよ、ちようどいい？」

って、お前、いいのかよ？ こ

れじゃあ、お前も」

「私？ ふふ。私は別に構わないわよ

あなたが死んでくれるなら、ね」

言いながら、ムツナは瞳を鋭く光らせて、俺をじつと睨みつけてくる。まるで、俺に対して恨み あるいはそれ以上の感情を抱いているような表情だ。

……いや、しかし、俺がムツナと初めて会ったのはただか数週間前だ。その後だってそこまで頻繁に会ったわけでもない。会話したのだって、この前のコロノ山の時くらいで、それ以外はほとんどしていない。そんな関係で、俺がここまで忌み嫌われる理由なんて思い当たらないが……。

「……な、何だ？ その言い方、まるで死んでも俺だけは殺したい、みたいなニュアンスじゃないか？ そんなに一杯食わされたのが悔しかったのか？ それとも、別な」

「うふふ。最後に一ついいことを教えてあげましょうか。私の本名

私の本名はね、ムツナ「レーガー」って言うのよ」

ムツナ……レーガー？ レーガー？ どこかで聞いたファミリネームだ。レーガー、レーガー……ええと……そうだ！ マーレッツト「レーガー」ってのがいた。そいつはカザミドリの十三番隊長で、一ヶ月前に

俺が殺した

ようやく俺は思い至り、一本糸が繋がり、そこから生まれる推測に俺の思考が硬直した瞬間

ドスリッ

俺の腹に熱い感触。

いつの間にかムツナが俺の正面に来ていて、その手にナイフを握っていて、その刃が俺の右脇腹に突き刺さっていた。

ムツナはそのまま俺の胸ポケットに手をつまむと、そこからトランシーバーを取り出した。そしてそれを思い切り床にたたきつける。当然のごとく、トランシーバーは粉碎。一瞬でスクラップになった。

「うふふふ！　そうよ！　そうなのよ、『闇鳥』！　ようやくわかった？　あなたなのよ！　あなたが私のお父さんを殺したのよ！」
かみ締めるように言いながら、ムツナはナイフの柄をぐるりと回す。

ぼたりと、俺の足元に血がこぼれ落ちる。

「あんたなのよ！　あんたが私の大切なものを、心のよりどころを、幸せを、安らぎを奪ったのよ！　あんたのせいで、私は悲しんだのよ！　悔やんだのよ！　全部が全部あんたのせいなのよ、『闇鳥』！」

感情に任せて叫ぶムツナ。

まるで脳を直接揺らすように、俺の脳にその声が響き渡る。

……し、知らなかった。そんな関係性があつたなんて。

そんな繋がりがあつたなんて。

確かに、俺はムツナの父親が死んだことは聞かされた。

コロノ山のロッジの中で聞かされた。

あの時の俺は、それを何ともなしに聞いていた。

友人の不幸話の一つとして、それ以上は何も思わずに聞いていた。

それ以上は、何も思う必要はなかった。

そもそも、俺とムツナは仕事で偶然出会っただけだ。

ギーンを介して、偶然見知っただけだ。

俺は、ムツナがカザミドリだと知らなかった。

ムツナは、俺が『闇鳥』だと知らなかった。

そのせいで　　そのせいで、俺は今の今まで……

と

ズルリッ

俺の腹部からナイフが抜かれた。

俺は腹を押さえたまま、どさりと床に倒れる。

「……うふふ。どうせなら、私の手で直々に殺してあげる」

そう言って、ナイフを振り上げるムツナ。そのまま俺の脳天を目掛けて振り下ろしてくる

が、

パシリッ

さすがに素人の太刀筋。俺は左手一本でその刃を止めた。腹に痛みが走っていても、意識が朦朧としていても、来ることが分かっている華奢な女の攻撃なら片手で止められる。これくらいなら、まだ何とかなる。

「くっ……」

ナイフが止まり、忌々しい表情になるムツナ。しかし

ドゴオンッ

ドガアンッ

部屋の隅で大きな目の爆発が二回。また机が吹き飛んだ。別の『銀石』が反応したんだろう。すでに四方八方に火の手が上がっていて、もはやどこから次の爆発がくるのか分からない状態だ。

「……ふん。まあ、いいわ。どのみち『銀石』の暴発でこの周囲はみんな消え去るんだから。どうせ時間の問題よ」

……くそっ、やばい。

痛みで意識が薄れかけている。ナイフを止めるのに集中するだけで精一杯。ムツナを突き飛ばそうにも、これ以上腕に力が入らない。早く、早く他の誰かにこのことを知らせなければ。伝えなければ。逃げるよう言わなければ。ここにいるみんなが一瞬で消し飛んじまう。なのに、トランシーバーは壊されたし、ここから走っていくほどの余力はもうないし。どうすれば……。

「うふふふふふ。もう、あなたに打つ手はないわよ！ 後悔して、後悔して、後悔して、このまま死になさい！ その忌々しい『闇鳥』

の名とともに」

ドスンッ

「きゃっ」

口上の途中、いきなり目の前のムツナが後方へ飛ばされた。白んでいる視界を上に向け、一体何が起こったのかと見ると、俺の眼前、そこには白髪のショートヘアとダボダボのパーカーしかし、左手には木製の義手を装備した

ワイトが立っていた。

「……ワ、ワイト！」

俺は右手で腹を押さえつつ、左手で上体を起こしながら叫んだ。

「お、お前、何でここへ？」

「……何とか……間に合った」

ワイトは首から上だけを俺の方に向け、相変わらずの静かなトーンで答える。

「私は……義手が……まだ思うように動かせないから……この作戦には……参加……できなかった。……マスターに……止められた。……だから……方々手を尽くして……ようやく……この場所を……突き止めた。……この場所に……たどり……着いた。……私は必ず……あなたを……守る。……あなたを守るために……私は……できるすべてのことを……する」

ドゴオオオオオンッ

またも爆発。今までのよりも大きい。壁が一瞬で黒くなった。しかし、ワイトはまったく動じる様子もなく、俺に包帯の塊を投げてくる。

「……ここにある『石』は……研究で……変色してて……ここから……すべての『銀石』を探し出すのは……私達には……至難。……」

もはや……逃げるしかない。……ムツナは……私が……抑える。
……あなたは……これで止血して……他の皆と……逃げて」

「逃げてって　　お前、左手使えないんだろ？　それであいつ
を止められるのかよ。向こうは刃物もちだぞ？」

「……何とか……止める」

呟くようにそう言つと、首を前に戻し、ワイトは前へと駆け出した。

相変わらずの俊敏な動きでムツナの方へ向かうワイト。

ムツナまであと五メートル　　といったところで、ムツナは
懐から赤い石を取り出し、それをワイトに向かって投げつけた。

ワイトはそれをひらりと左に跳んでかわしながら、さらにムツナ
へと近づいていく。

ワイトがムツナの眼前に達した瞬間、ムツナがナイフを振った

が、ワイトは右手でそれを白羽取り。刃が肌に触れ血を滲ま
せながらも、その軌道を完全に止める。

ワイトはそのまま足を振り上げ、ムツナに蹴りを加えようとする
が、ムツナは残りの左手を再び懐に入れ、今度は黄色い石
を掌握。そのままワイトに投げつけた。

至近距離の攻撃で避ける術もなく、石はワイトの upper body に直撃。バ
チチチツと電撃が走り、ワイトは片膝をつく。が、辛うじてナイフ
は止まったままだ。

俺は思わずワイトの方へ駆け寄ろうとする。が、前足に力が入ら
ず、ふらりと俺は床に伏した。

「……わ、ワイト」

「早く……逃げて。……ここは……私が……何としても止める……
から」

「だって、それじゃ、お前が……」

「……私は……大丈夫」

ワイトは俺に後頭部を見せたまま、声だけで答える。

「私は、あなたにも……誰にも見限られたくない。……見限られる

のが……怖い。……だから……私は……誰も……見限らない。……
ウェリイも……ギーンも……ロットも……ルーも……そして……
……あなたも」

ナイフを受け止めている華奢な後ろ姿。しかし力強い声で、

「……あなたを守るのが……私の幸せ。……ウェリイを守るのが……
私の幸せ。……ギーンを守るのが……私の幸せ。……みなを守る
のも……私の幸せ　　みなを守る自由があつて……私はすごく

幸せ」

……相変わらず朦朧としている俺の意識。

しかしその片隅で、俺は確信した。

誰も見限らない。

みなを守るのも私の幸せ

やはり、ワイトはボーダーラインの向こう側の人間だ。どう転んでも、こちら側には来ない人間なんだ。こちら側に来るべき人間ではないんだ。

過去の自分を悔やみ、恐れ、震え、そして泣いていた。

思えば、そんな人間がこちら側のはずもない。

どんな過去があろうとも、ワイトはずっとラインの向こう側の人間だったんだ。

ワイトが俺と共に歩む可能性はない。

お互いにどんな感情を抱いていようと、歩む道は別。

俺はやっと思いつた。

確認した。

確信した。

そして思った

ワイトには、もっと生きていて欲しい。

道を踏み外した人間を見限らなかったのは、むしろ俺じゃなくて
ワイトの方だったんだろう。

俺の本性を知って、それでも俺の側にいてくれたのはワイトだったんだ。

甘えていたのは俺で、甘やかしてくれたのはワイトだったんだ。救われたのは俺で、救ってくれたのはワイトだったんだ。きつとワイトなら、もつと大きな幸せを見つけることができる。もつと幸せになれる。

だから、ここで散らせたくない。

俺はそう思い　　包帯で腹の止血をしながら、ふらつく足に力を込めながら、一步一步とワイトの方へと進んでいく。

力比べ　　というより根比べを続けているワイトとムツナ。俺はその背後にたどり着くと、ワイトの襟首に手をかけた。

「……え？」

それに驚きワイトのての力が弱まった一瞬、俺は現在のあらん限りの力でワイトの首筋をつかむと、そのまま後方へ投げ飛ばした。そのまま、研究所の扉から外へと投げ出されるワイト。

俺はワイトが起き上がる前に扉の方へ行き、ボタンと閉めた。当然のごとくカギもかける。

「……え？　……ちよつと……ダルク？」

ドア越しに聞こえるワイトの声。

「……な、何するの……ダルク……ダルク！」

外からドンドンと叩きながら、声が届く。

「ダルク！　ダルク！　な、何するの！　ダルク！　必死なワイトの叫び。」

「ダルク！　ダルク！　ダルク！　ダルクーツ！」

……　思えば、ワイトの叫び声なんて初めて聞いた。一年以上の付き合いだが、これが最初だ　　そして、最後だ。

俺はドアから離れ、ムツナの方へと進んでいった。

ムツナはナイフを握ったまま、ぽかんと

「ちよつと、何？　何のつもり？」

「……交換条件だ」

俺はまだ収まらない腹部の痛みに耐えつつ、静かに答えた。

「お前の望通り俺は死んでやる　　だから、お前も死ね」

「……………は？」

口を丸く開け、立ち尽くすムツナ。

しかし俺はそれ以上の説明はせず、壁際の棚の方へと歩き出した。そこに数十枚積んであるのは、黒い板　　恐らく『黒石』の板だろう。石ころ程度の量を手に入れるのにも苦勞する『石』だつていうのに、こんな塊を何十枚も確保しているとは。つくづく、カザミドリつてのは恐ろしい集団だ。

俺はその板を慎重に　　誤って発動させてしまわないように、慎重に　　持ち上げると、それをそのまま壁に立て掛けていった。一枚、二枚、三枚と、四方を包むように隙間なく置いていく。

「……………な、何してるの？」

「バリケードさ」

俺は手を休めないまま答える。

「『黒石』で防御壁を作れば、もしかしたら『銀石』の影響を遮れるかもしれない。……天井と床まで覆うのは難しいが、ここは地上階だし、入口からの距離からして、恐らくこの上には賞金稼ぎは誰もいないはずだ。だから、横さえ塞げれば誰も死ななくて済む」

「……………でも、『銀石』っていうのは、空間を歪めるのよ？ それを『黒石』で止められるなんて、そんな話聞いてない。そんな研究結果は聞いてないわよ。一体なんの根拠があつて　　」

「別に、俺だつて確信があるわけじゃないさ」

俺は言いながら、入口のドアにも『黒石』の板を立て掛けた。

聞こえていたワイトの叫び声が少し弱まる。

「ただ、もしかしたらっていう可能性にかけてるだけさ。防ぎきれればラッキー。無理ならしょうがない。それだけだ」

……………まあ、だからと言って、考えなしにこんなことをしてるわけじゃないがね。

以前、ギーンに聞いたことがある。『黒石』の特性『分断』は、

エネルギーを消し去ることによって起こるんだと。分子と分子、原子と原子の結合のエネルギーが消えることで、ものが分断される。だから『黒石』は刃物なんかに使うと効果を発揮するが、しかし、その根源的な特性は、あくまでエネルギーを消し去ること。

もし空間を歪めるエネルギーを消し去ることができれば、『銀石』の暴発を止めることができるんじゃないか？

俺はそういう予見を持ってこういう行動をしているのである。…確信がないのは変わらないが。

「……どちらにしろ、こここの『銀石』が発動した瞬間、俺達は死ぬんだ。あとはどうなっても、どうしようもないさ。責任の取りようはない。とにかく、俺も死んでやるから、お前もこのバリケードを壊すなっということだ」

俺は三十五枚目の『黒石』の板を立て掛けた。これで、四方の壁がすべて覆われたことになる。

「な、何で」

まだ納得が言っていないような顔で、ムツナが呟いた。

「何であなたはこんなことするの？ だって、普通、この状況なら、私をどうにか行動不能にして、自分は仲間と一緒に逃げようって、そういう行動をするものでしょう？ なのに、何であなたはこんなことをするの？ 何でわざわざ、自分が死ぬような選択肢を選ぶの？」

「……別に、俺の勝手だろ」

俺は答えながら、入口のドアの前に座った。

そこら中の机や棚が燃え盛る音で、もはやホワイトの声は聞こえてこなくなった。

「……それよりも、もっと喜んだらどうなんだ？ せっかく親の仇の俺が死ぬんだ。目の前で死ぬんだ。お前の念願が叶うんだ。お前にとっちゃあ、もう少し嬉しい場面だろう？」

「……う、うん」

戸惑ったように返事をするムツナ。と

ドゴオオオオオンッ

ドゴオオオオオンッ

ドガアアアアンッ

ドゴオオオオオンッ

あちこちで爆発。すでに部屋の中は真っ赤で、やたら暑く息苦しかった。……もしかしたら俺達は、窒息で意識を失うのが先かもしれない。

ドガアアアアンッ

ドゴオオオオオンッ

いよいよ、『銀石』の粒の発動がひっきりなしに起こるようになってきた。

轟音が響くたびに、ムツナが肩を震わせている。……まあ、無理もない。もしかしたらその爆発の瞬間が、自分の最期かもしれないんだ。村を一個消滅させるほどのポテンシャルを持った『石』。その百分の一の大きさでも、俺達は跡形もなく消え去るだろう。

ドゴオオオオオンッ

ドガアアアアンッ

俺は爆発音を聞きながら、ため息を一つこぼした。

……俺がこんな最期を迎えて、ロットは、ルーは、どう思うだろう？ ギーンは、ウエリイは、どう思うだろう？ ラキはどう思うだろう？ アンディさんはどう思うだろう？ 笑うだろうか？ 馬鹿にするだろうか？ 嘲るだろうか？ 軽蔑するだろうか？ ……泣くだろうか？

一体、俺は今まで何のために生きてたんだろうか？

何のために賞金稼ぎをしてたんだろうか？

何のためにアサシンのスキルを教え込まれていたんだろうか？

本当、バカバカしい。バカバカしすぎる が、俺は

と、

目の前、ムツナがいきなり立ち上がった。

そしてこっちに向かって 出入り口のドアに向かって 駆け
てくる。

俺の横を通り過ぎ、そのままドアを蹴破ろうとする。

俺はその襟首を後ろから掴み、そのまま地面に押さえつけた。

「は、離しなさいよ！」

「……何だよ、お前、いきなり。ドアをあけてどうするつもりだ？」

「ど、どうするって」

ドガアアアアンツ

部屋の隅で爆発。それに反応し、ムツナが肩をびくりと振るわせる。

「だ、だって、このままここにいたら………死んじゃうじゃない！」

「……は？ 何言ってるんだ？ だからこそその交換条件だろ」

「し、知らないわよ！ そんなの！ わ、私は死にたくないもん！
腕に力を入れ、何とか立ち上がろうとするムツナ。

俺は全体重をかけ、上から押さえつける。

「だ、だって、私、死にたくないもん！ 死にたくないもん！ 死
にたくないもん！」

「……死にたくないって、先に俺と心中しようとしたのはお前だろ。
それに、今さらそんな理屈が通ると思ってるのか？」

「死にたくないもん！ 死んじゃだめだもん！ だって、この命は、
お父さんがくれたものなんだもん！ 私の大切なお父さんが残して
くれたものなんだもん！」

ムツナの叫びが、段々涙声になっていく。

俺は嘆息しながら、

「……つつたつて、お前、カザミドリとして、今まで何万人の命を
奪ったと思ってるんだ？ そんだけの人間を殺しておいて、今さら
死にたくないなんて、どうして言えるんだ」

「だって、そんなの他人じゃない！ ただの背景じゃない！ 私の

.....

.....

.....

.....

と

「 火炎斬鉄 ！」

いきなり、壁越しに聞こえてくる声。

直後、入口のドアが破かれ、立て掛けてあった『黒石』の板が俺の方に吹き飛んでくる。

俺は思わずそれを避けた。見ると、『黒石』の板の下、床が粉々になっている。『黒石』の性質は『分断』。つまり、その表面にぶつかれば粉々になるということで、もし俺が避けてなかったら、俺の体は……

「ダルクー！ 無事かー？」

「お前に殺されそうになったわ！」

俺は思わず突っ込んだ。……いや、もとい、

「ロット、お前、何でここに？」

「いや、ピンチの香りがしてな。参上してやったぞ」

「そりゃ、どんな香りだよ。……つか、ここじゃ『銀石』が暴発してるんだ。なのに、お前、せっかくのバリケード壊しやがって」

「ふむ。それはワイトから聞いた。大丈夫だ。心配はいらんぞ」

「心配いらんて、一体」

と、いきなりロットの横から部屋に入ってきた人影。青い銃を右手に握った、青いロングヘアーの女の子　　ルーだ。

ルーは炎を避けつつ、机の上のピーカーを手取る。そしてその中を睨みつつ、その中身を『サイキ』の中に詰め込んでいく。

「お、おい！　ルー！　何してるんだ？」

「んー？　『銀石』を集めてるの」

「『銀石』って……ここにある『石』は、研究途中で色々変色してるんだ。どれがどれだか分からないのに、お前、分かるのか？」

「まーねっ。これでも科学者のはしくれだからっ」

そう言いながら、ルーはぽいぽいと『石』を判別していく。

……もし一緒に『赤石』なんかを入れようもんなら、すぐさま大爆発を起こしそうなもんだが。しかし十数個のピーカーをひっくり返してるのに何も起こらないのは、識別がうまくいってるってことなんだろうか。

鼻歌でも歌いそうなノリで四方の棚を回っていくルー。そして数分後、

「うん、これで全部だね。……じゃあ、窓開けて」

「了解」

言いながら、ロットが『黒石』の板をどかし、閉め切っていた雨戸を開け、窓を開け放した。

差し込む太陽光。久しぶりに見たような気がする、晴れ渡る青空。遠方に山がうつすら見えるだけで、眼下には緑色の平原しか見えない。

ルーはその窓の外へ『サイキ』の銃口を向けると、そのまま引き金を引いた。

ズドンッ

発射される弾。

コルト博士の設計通り、『銀石』は暴発しなかったみたいだ。
『サイキ』の銃口から続いて、青空に軌道が描かれる。
そして数秒の後、

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

まるで花火のように、空にキレイな閃光が瞬いた。

最終話

カザミドリ壊滅のニュースは、瞬く間に全世界に広がった。

それはそうだろう。全部で七つもの町や村を消し飛ばしたせいで、その存在はすでに世界中の人間に知れ渡ってたんだ。一体いつ自分の居住区が狙われるのか、そんな不安を人々に抱かせていた。このところの、世界中の人間の第一の関心事項だったんだ。

そして、その不安が一気に取り除かれた。

取り除いたのは、ギルドに属する賞金稼ぎ達。

今まではただの便利屋か、もしくは粗野な用心棒くらいにしか認知されていなかった賞金稼ぎが、この業績のおかげで少しばかり見直され始めたらしい。賞金の相場が数十ドル上がったところもあるそう。懐が厳しい新米にはありがたい話だろう。ロットやルー達にとっても、この上ない朗報である。

しかし、俺にはもう関係ない。

俺はもう、ギルドに足を踏み入れない。賞金稼ぎを名乗らない

そう決めたんだ。

しかし、そんな決心を抱えながらも、カザミドリ壊滅作戦の後、俺は一旦アステルに帰ってきた。別にそこまで急かなければならないような状況でもなかったし、それにまだ何も準備をしてなかった家のことや大きな荷物に関してはラキなんかと話し合わなければならぬだろうが、それ以外にも旅支度はせねばなるまい。この家に二度と戻らない可能性だってあるんだ。適当に済ませるわけにもいかないだろう。ちゃんと考えなきゃならない。

そんなわけで、俺は他のメンバーと共にアステルに戻った。

そして、我が家で一晩休んだ。

次の日の午前中は、両親の墓参り。加えて、ヒューミッドを討ったことの報告。をしたロットに付き添った。ロットは十分以上、墓の前で手を合わせたまま黙り込んでいた。俺の知る限り、寝てる

とき以外で（いや、就寝中だつてたいがいうるさいものだったが）、ロットが沈黙を保った最長時間だ。そんなに長い間一体何を思っていたのか、何を伝えていたのか、俺は別に聞いたりしなかったが。午後にはクルート博士が町に帰ってきて、ルーと数年ぶりのご対面。そこに居合わせた俺は、再び喜び泣くルー一家を眺めることになった。ルーの母親と一緒に祝いしようと夕飯に誘ってくれたのだが、俺は遠慮した。久方ぶりの家族水入らずを他人が邪魔するのも悪いだろう。とりあえず俺は「おめでとうございます」とだけ言つて、そそくさとルーの家をあとにした。

とまあそんな風に、その日は一日完全に潰れてしまい

さらに次の日。

いつものようにギルドへ次の仕事を探しにいくと、俺の家にまで迎えに来たロットとルーと道を歩きながら、俺はようやく

「……なあ、ロット、ルー。ちょっと話があるんだが」

と、切り出した。

一応、言わないで行く　という選択肢もあった。その方が変に気を揉まなくて済むだろうし、色々とスムーズに行くだろう。しかし内情が内情だ。これからのことを考えれば、特にこの二人には俺に関するすべての情報を秘密にしておいて貰う必要がある。きちんと頼んでおく必要がある。別に二人を信頼してないわけじゃないが、面と向かってちゃんと伝えておいた方がいい。

だから俺は、周囲に他の誰もいないのを確認しつつ、言葉を続けた。

「あのさ……俺はもう、ギルドに行くつもりはないんだ」

「何だ？　急にどうした？　五月病にでもかかったのか？　……まったく、仕事にかける熱意が足りとらんだ。そんなんでは後世に名を残すなど、夢のまた夢だぞ。むしろ末代までの恥さらし者として語り継がれてしまう」

「……言つとくが、俺は一度も後世に名を残したいなんて言つたことはないぞ。それはお前の目標だろ。俺まで巻き込むな。……つか、話の腰を捻じ曲げるな。まじめな話なんだから。ええと、だから、俺はもうギルドを辞めるんだ。辞めて
暗殺者『闇鳥』
として生きてくことにしたんだ」

「は？」

「へ？」

きょとんとした顔で、ロツトとルーが振り返ってきた。

「何だ？ どうした？ この前の仕事で、いよいよ自信がなくなつたのか？ ……まあ、無理もない。あんな情報屋の小娘一人を、三人がかりのフォローがあつてようやく捕まえるにいたつたんだからな。自分の能力がいかに未熟かを思い知らされたらう……。しかし、お前もまだ十六だ。アリンコの眉間程度にはまだ伸びシロもあるだらう。だから諦めず精進して」

「違う！ つか、失礼なこと言うな！ イヴ相手にてこずつてたお前を助けてやったのは誰だと思つてるんだ！ 俺はそこまで落ちぶれてない！ ……というか、頼むから話を進めさせてくれ。つまりだな、俺は元々暗殺者としてのスキルを磨いていた人間で、『闇鳥』なんぞと呼ばれてたつてのは話しただらう？ そしてこの前のことで他の数人の賞金稼ぎにもこの事実を知られちゃった。だから、俺はギルドを辞めるんだ」

「は？」

「へ？」

再びきょとんとするロツトとルー。

ロツトが首を傾げながら、

「お前が『闇鳥』であることは分かつてるが
だからって、
何でお前がギルドを辞めるんだ？」

「いや、だから、当然だらう……」

俺はがつくりと肩を落としながら答えた。

「暗殺屋が普通に仕事ができるわけないだらう？ 俺はいつか、暗

殺稼業で食っていくことになる。その時に、俺の素性がバレてるのはまずいんだ。だから、それが公になる前にそれを隠す必要がある」
「しかし、この前のカザミドリ壊滅作戦では、アンディさんが根回ししてくれたおかげで、必要以上にその秘密は広まらなかったのだろう？ 知られたのは、三、四人の上級賞金稼ぎのみだ。カザミドリの残党も誰一人取り逃がさなかったらしいし。秘密は守られてるのではないか」

「いや、万が一ってこともあるだろう？ 特に残党を全員捕まえたかなんて、百パーセント把握しようがないんだから」

「すると、何か？ お前は、アンディさんの力量を疑っているというのか？」

「い、いや。そういうわけじゃないが……」

話が変わる方向に転がり、俺は思わず言い淀んでしまう。

「……つか、俺は言うなれば人殺しなんだ。そんな人間が、大っぴらに仕事ができるわけないだろう？」

「別にお前は、まだ踏み外したわけじゃないだろう。カザミドリの人間など、元々デッドオアアライヴの賞金首だったわけだし、な」

「それはそうだが……それにしても、だ。問題は、俺は人に向かって思慮なく、考慮なく、遠慮なく、躊躇なく刃を振り下ろせる人間だってことだ。俺は今までそういう風に仕込まれてきた。俺は立ち止まらないんだ。立ち止まれないんだ。俺にはそういうストッパーがないってことなんだ。普通の人間にはあるものが、俺にはないんだ。当然のようにあるはずのものが、まるで当然のように俺の中には存在しないんだ。たとえ今はまだ賞金稼ぎの範疇の中で済んでいても、それは運がいいか、機が熟していないだけ。問題がないわけじゃない。解決されてるわけじゃない。何の保障もない。これからのことは分からない。……いや、済まなくなる可能性の方が高い。分かるだろう？」

俺は話を俺のペースに戻そうと、説明を続ける。

「目の前に死体があるのが、血しぶきが上がるのが、断末魔が上がる

ろうが、俺は何も思わない。何とも思わない。刃を振るう。刃を振り続ける。人を殺して後悔している人間に、俺は共感できない。その気持ちが分からない。分かってあげられない。そういう人間なんだ。そういう道の上を歩く人間なんだ。一線を越えた人間なんだ。ボーダーラインの向こう側の人間なんだ。お前らとは違う。違いすぎる。だから俺は」

「ふん、ダルク、お前」

ふいに俺の言葉の途中、ロットが鼻で笑いながら俺の方を見やり、

「よほど人殺しに戸惑ってるんだな」

「……へ？」

……俺が戸惑ってる？ 人殺しに？ ……いや、何を言ってるんだ？ それは、逆だろう……

「毎度ながらのお前の非生産的な話だが、今日はこと長つたらしくて敵わん。『自分はギルドを辞めるべき』。その結論を見つけるために、よくもまあ、それだけの言葉を尽くしてくれたものだが。……逆に言えば、お前はそれだけの言葉を用いなければ、そういう結論にたどり着けないということだろう？ 『自分はギルドを辞めるべき』だと言い切れないのだろう？」

………。

「結局のところ、お前が笠に着ようとしている理由は、どれも不十分だということだろう。現時点では決断の根拠にするには足らない。アンディさんがお膳立てしてくれたおかげで秘密はある程度守られているし、お前はまだ人の道を踏み外してはいないし、な」

「人の道を踏み外していないって、しかし、俺の内面にはそういう要因が」

「要因など、私の知ったことではない。言っただろう？ 私は結果しか見ないのだ。結果しか認めないのだ。結果しか求めないのだ。現在の結果では、お前はまだこちら側だ。それ以上でも以下でもな

い。それ以外の何ものでもない。それ以外は、私は知らない。私には関係ない。……ふん。結局、問題は簡単だろう。単純だろう。ようは、一言で済む。ワンクエスチョンで済む。ダルク、お前は

賞金稼ぎを続けたいのか？」

いつもの底抜けた声で、ロットはあっけらかんと俺に問いかけてきた。

突然の質問。

問われて、俺は考える。

考える、考える、考える。

考え込む、考え込む、考え込む。

……俺が、賞金稼ぎを続けたいか？

俺は、『賞金稼ぎ』をどう思ってる？

俺がギルドに登録してから今までの、二年ちよつとの期間。

そこまで長くはないが、しかし決して短くもない。

どんなことがあったっけ。

どんな人に出会ったっけ。

どんな時間を過ごしたっけ。

楽しかったこともあった。おもしろかったこともあった。

つまらなかったこともあった。退屈なこともあった。

悩んだこともあった。苦しんだこともあった。

呆れたこともあった。怒りを覚えたこともあった。

悔しかったこともあった。後悔したこともあった。

死にかけたこともあった。疲れ果てたこともいくつもあった。

そんな出来事を、ロットとルーと一緒に駆け抜けてきた。

果たして俺は、これから どうしたいんだろう？

……よく、分からない。

分からない、分からない、分からない。

考えが巡るだけで、答えが出ない。

俺は、一方で自分を暗殺者と認識しながら暮らしてたんだ。

そんな単純な日々ではなかったんだ。

そんな単純な問題じゃない。

そんな簡単な問題じゃない。

俺の中では、なかなか結論が出ない。

結論が出せない。

何も言えない。

何も答えられない。

俺は答えあぐね、黙り込んだ。

黙り込んでしまった。

しかし、なぜかロットの中では、俺の中よりもあっさりと、迅速に、シンプルに結論が出たらしく

「ほれ、早く行くぞ」

と言って、俺に背を向け歩き出した。

ふと、俺の顔を楽しそうに眺めていたルーが、

「うふふつ。そりゃあ、ダルクの心の中は、ダルクにしか分からないんだろうけどさあ……でも、今までずっとチームを組んできて、ダルクを別な世界の人だなんて一度も思ったことはないよ。あの時、ダルクがムツナと一緒に死のうとしたのも、その重大さを理解してたからじゃないの？ 少なくともムツナよりは、それをちゃんと受け止めてたからじゃないの？ ……それにさ、ダルクが本当はどんな人間でも、今まで私達が一緒に仕事をこなしてきた事実は覆せないんだよ。時間は巻き戻せないんだよ。うふふ。ダルク、あなたがどんな人間でもね

あたしは愛してるよ」

両手を背中越しで組み、はにかむように言ってくるルー。

そしてくるりと振り返り、ロットを追って歩き出した。

俺の前を進んで行く二つの背中。

赤い短髪と青い長髪。

俺もその後を追おうとして

ふいに、頬のむずがゆい感触

に気付いた。

手の甲でそれを拭うと、それは

涙。

何でまた

と俺は一瞬戸惑ったが、すぐに分かった。

その涙の意味を理解した。

そうか。俺はこの二人と一緒にいられて、嬉しかったんだ。

いつも文句ばかり言って、呆れてばかりいて、ため息ばかりついて
いたけど、結局はそういうことだったんだ

文句ばかり言

って、呆れてばかりいて、ため息ばかりついていたにも関わらず俺
がこの二人とチームを組んでいたのは、そういうことだったんだ。

俺は両目をごしごしと拭った。

そして、二人の背中を追いかけていく。

はぐれないようにについていく。

『闇鳥』ことこの俺、ダルク・アーシムは、もう少しだけ、このは
た迷惑な厚顔無恥男ロットと、能天気で天然無邪気な少女ルーと共
に、

泣いて、

歌って、

飛んでいくことにした。

闇鳥 E N D

最終話（後書き）

あとがき

ということでは『闇鳥のナキカタ』及び『闇鳥シリーズ』の完結と
あいなりました。

このシリーズの第一作、トビカタは、式織が生まれて二つ目に書
いたものでして、まさかここまで続けるとは当時（一年ちよつと前
ですが）思っておりませんでした。実は、トビカタを書き終えた段
階では、このお話はデッドエンド（withワイト）だったのです
が、その後思い直しこのような結末になりました。

ナキカタ単体としては、異世界ファンタジーでミステリチツ
クなことをしたのが、果たしてアリなのかナシなのか悩みました
が。まあ、趣味の範疇ですし、これくらいはいいかな、と。

とにもかくにも、長々とお付き合いくださってありがとうござい
ました。

また別作品でもお会いできればと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3950e/>

闇鳥のナキカタ

2010年10月8日14時24分発行